
～ 神様に呼ばれて～ (GSの二次)

発想屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（神様に呼ばれて）（GSの二次）

【Nコード】

N0605X

【作者名】

発想屋

【あらすじ】

神木明人……彼が、またもやってきました。

史上最強の弟子ケンイチの世界に転生し、H×Hの世界に移動……そして今度は神様と会って、チートアイテムを貰い、世界移動を行います。

H×H世界に移動したとき、に記憶を失った為、名前はナナシのゴンベと名乗っています……移動した先ですぐに思い出します。

そして向かった先は……GSの世界

そこでYOKOSIMAと出会い、彼は何をなさそうとするのか
よろしければ、すこしだけ、覗いて行ってくれると嬉しいです。

この小説は

史上最強の奇術師アキト（史上最強の弟子ケンイチの二次）
神木明人改めナナシのゴンベー！（H×Hの二次）

と、二つの世界を渡った青年の物語です。

前の二つを読まなくても分かるように書くつもりですのでよろしければお付き合いください。

神様に呼ばれました(前書き)

はじめての方は、はじめまして

お久しぶりの方はお久しぶりです。

GSの二次です。

H×Hを書き始めたころにハマってしまい、書きたい書きたいと思いつつも完結が一つもない状況で書く訳に行かないだろうと思いい、H×Hを打ちきりにした、馬鹿作者です。

のんびりと書いて行くつもりなのでいつも通り、不定期更新ですが、どうかよろしくお願いいたします。

神様に呼ばれました

目を覚ますとそこは、青の世界だった。

一面に広がる水の水平線……そんな水の上に俺は立っていた。

……てか、立ったまま寝てたのかよ。俺……と言っよりも何処だ
こじっ？

首を傾げてみるが、見当など付くはずもない。

見渡す限り、水の水平線と真っ青な空、雲ひとつ、どころか太陽
さえない

いったい、どんな世界なのだろうか……

そもそも、色と言うのは光の反射によって認識できるんだが……
太陽もないのに、俺の目はどうやって認識しているのだろうか……
………考えても無駄だな

まあ、そんな不思議空間に俺は居る

そして格好を見てみると、相変わらずいつもの格好のようだ、黒
いシャツに黒のシーンス。腕には手甲、シャツの中には鎖帷子……
ああ！？ 刀！！ 俺の刀が無い！！ そしてトランクもない！？

……しぐれさんにもらった大事な刀なのに

涙が出てきた……しくしく

「刀、俺の刀」

たしかに、H×Hの世界じゃ、あんまり使ってなかったけどさあ……でも死ぬときまでは持ってたんだよ……（操作系の能力者だった為、刀の使いどころが見つからなかったのだ）

体育座りである〜と涙を流している

救いは手甲と鎖帷子があることだろうか……

数時間ほど体育座りで涙を流していたが、いつまでも泣いていてもしようがないので、諦める……諦めきれないけど、諦める。

「はあ……ごめん、しぐれさん。俺は悪い子です」

しぐれさんを空に浮かべて土下座する。

「それはそうとここはどこなんだ？ ケンイチの世界に転生して、H×Hの世界にトリップして、あれか？ 今度は憑依でもしたのか？ てか、俺の人生はどうなっとなんじゃ」

『波乱万丈の人生じゃのう』

声のした方向に振り返ってみると、そこには少女がいつの間にか立っていた。

白いローブに杖を持ったお嬢さんが居た。

褐色の肌で黒髪の少女、額と頬にひし形のマークが書かれている少女だった。

イメージとしてはああっ女神さまの長女と三女を足して二で割った感じ……

「……………こ、この俺様が気配に気づかなかっただとお！？」

まあ、そう言つこともあるよなあ……………と続けて呟く。

むしろ、さっきの言葉は、言わないといけないような気がしたから言っただけだ。

『……………なんだかなあ』

なぜか、呆れている少女

「そんで、お嬢さんはどちらさん？」

『神じゃ』

「へえ、そうなんだ。それで何か用？ あ、もしかして死んだから、お迎えの人？」

最後のH×Hの世界じゃ、メルエム（キメラアントの王）の奴を説得しきれなくて……………ネテロ爺さんの爆弾を起動させ、死を選んだのだ。

……ある意味、自殺だから、地獄行きかなあ？

「ワシは死神じゃなくて、管理神じゃよ。お主が居たH×Hの世界や、その並行世界などを管理しとるんじゃ」

「へえ」

そついや、地獄とかあるのかな？

『うむ、あるぞ、血の池温泉や、マグマの海なんかはかなりの観光名所じゃな』

観光名所なんだ。んじゃ、天国は？

『この世のすべてがそこにある』

どこのワンピースじゃ

思わずツッコミを入れてしまった……恥ずかしい

無言で手をビシッ！…とか……恥ずかしすぎる！…

『心を読んでおったことは無視なのかああ！？』

神様が、いきなり怒鳴ってきた。怖い、この人……

『はあはあ、お主……H×H世界での性格と変わっておらんか？』

「ん？ そんな事無いよ。相手によって、対応を変えてるだけだか

ら」

手のひらを振って、首をふるふると横に振る

それにしても、この神様、なんか威厳を感じないんだよねえ……
むしろ親しみを感じる

すごい力は感じるんだけどねえ……

「まあ、そんなことより、なんで俺を？」

『む、おお、そうじゃったそうじゃった。忘れとったわい。お主が
あまりにも特異過ぎてのう』

「はあ？」

『お主、どうやってあの世界に紛れ込んだんじゃ？』

「？」

あの世界？

『H×Hの世界の事じゃ、ワシはお主のような存在を送った覚えは
ないんじゃないよ』

なんの事だかよくわからんのだが……

『では、分かりやすく説明してやろう』

そう言つと木が生えてきた。

『この木がお主の居る世界じゃ、そしてワシはこの木の観測をする者と思えばよい』

小学生の観察日記みたいだな……

『まあ、そんなもんじゃ…… ifの世界。パラレルワールドについては知っておるな？ もし、こんな事があつたら、あの時こうして居たら……という世界じゃ。それが枝分かれした枝だと思ってくれ』

うん、まあ、知ってる。それで？

『ただ事の成り行きを観察するのも最初は楽しかったんだが……なあとというか、このあふれんばかりの知的好奇心が抑えきれなくなってしまうてのう。ある枝から別の枝に人間を移動させたんじゃよ』

ふむふむ、その中には俺は居なかったと？

『そうなんじゃよ。それに…… ナナシじゃったな』

まあ、名前が思い出せないから仮の名前だけだね

『この紙には人間の生まれや、今までどうやって生きていたのかが、載る紙なんじゃが……』

その紙を渡されて見てみると……名前ナナシのゴンベ、身長182?、体重102?（外見は細身）と写真しか載っていない。

いつの間にか身長伸びてたんだなあ……

「何これ……」

『ワシにはお主の事が分からんと言うことよ。お主の過去も未来も見ること出来ない。つまりそれはお主がワシの管理をする世界群とは別の世界群から来た可能性があると言うことじゃ』

へえ、ほう、それで？

『むう、ここまで言うてわからんのか！！ あれじゃ！！ ワシよりも高位の存在、もしくは同位の存在が居ると言う証明なのじゃ！！』

嬉しそうやねえ

『当たり前であろう！？ いつの間にか存在し、全知全能などというつまらん能力を最初から待っていたのじゃぞ。なのに、感情があり、狂うことも許されん！！ 永遠の時を生きながら、ただ人間の生を眺めていたのじゃからな。そこで！！』

そこで？

『お主には別の世界群を探しに行つてほしい』

はあ

『なんじゃ、その気の抜けた返事は！！ ああ、安心せい。ちゃんと死なぬようにチート能力も付けてやるわ！！』

そう言つと少女は、何処からか金槌を出した後、木を出した時のように何処からか材料を出した。

水が固体化したところを見ると、材料は足元にある水らしい……

トンテンカン、トンテンカン、ドカーン……！ ドカーン……！
ガガガガガガ、キュピーン……！ ドヒューン……！ ドドドドドド
……！ ドタン……！ バリバリバリ……！ ガシュ……！ Grrooooo
oooooooooooo……！

テツテレッツテーン……！

上手に出来ました……！！

『出来た……！ まずはこれじゃ……！』

そう言っただけで差し出されたのは、タバコ？

この少女神様の似顔絵の入ったタバコの箱だった。

中身を見てみるとタバコが数本入っていた。

「なんで、数本しか入ってないのさ？」

『それはお主の力に関係しているからじゃ。今のお主ではその本数しか作り出せんとする事よ』

んじゃ、この箱はタバコの製造機で、タバコを吸うことで何かしらの能力が手に入るってことなのかな？

『うむ、その通りなのじゃ……！ その名は外気吸い取り君……！
これから向かう場所は、ワシが力を与えても使えない可能性もある
のでな。道具と言う形で作ってみたのじゃ』

それで、どんな能力が？

『おお、そうじゃったの。説明をせねばな。まあ、とにかく、そのタバコに火をつけてみい』

火が無いんですけど？

『なんじゃ、炎も生み出せんのか……ちょっとまっとれ』

そう言っただけ……キュイン（以下略）

『出来た！！ 魔導ライター番号！！』

番号もあるのだろうか……

『このライターはお主の魔力を燃料にして炎を生み出す道具じゃ』

そう言っただけ。

タバコを一本取り出して咥え火をつけると……オーラがライターに持ってかれた。

「うお！？」

しかも火の勢いが強くて前髪が燃えかけた。

『それはお主の力を燃料にしておるから、ちゃんと意識したほうがよいぞ』

そう言うことは先に言っただけ。とりあえず、オーラを調節して、普通に火をつける。

ふう、タバコが美味しい……。

「ってなんじゃ、こりゃ……」

H×Hで身に付けた念……その生命エネルギーであるオーラの量が膨れ上がったのだ。

いまなら、メルエムを相手にしても打撃で互角に戦えるほどのオーラ量だ。刀があれば、切る事も可能だろう。

「それが外気を取り込むと言うことよ。外気はどんな世界にも存在するからな。たとえどんな環境に居ても、そのタバコを吸っていれば死ぬことは無い」

「てか、なんでタバコ？」

『ワシの趣味じゃ』

むしろ作者の趣味だ。

「いま、なんか、へんな声が聞こえた気が……」

『ん？ この場所にはワシとお主しか居らんはずだが？』

「まあ、いいや。それで……どうやって外の世界に行くの？」

『うむ、その事ならちゃんと考えてあるわい』

そう言ってぺちんと指を鳴らす少女

俺の足元に穴が開く。

「あ、ちよっ！！ まだ頼みがあああああああああああ
.....」

そうして俺は外の世界へと旅立ったのである、まる

修行をすることになりました

落とされたそこは真っ黒な場所だった。

落ちているのか、留まっているのかさえも分からないようなそんな空間に一人、俺は取り残されていた。

ライターに火をつけてみるが何も見えない。

そもそも火が見えるだけで周りが明るくならないと言う不思議な場所だった。

蓋を閉めて火を消し、ポケットにしまう。

寒さも熱さも感じず、漂っているよう感覚に身を任せる。

暇である。

かなり、暇だ。

ひまひまひまひまひまひま……

とりあえず、寝た。

で、起きる

変化なし

体を動かしてみる。

知っている武術の型をただひたすら繰り返す。

繰り返し、繰り返す。

そんな事を延々とやっていると……

光が見えた。

「……白い光？」

出口だろうか？ それとも別の何かだろうか？

とりあえず、漂っている状態なので泳ぐような感じで光の方へと進んで行った。

そしてその光に触れると……

その光の中に吸い込まれ、吐き出される。

頭から地面に叩きつけられ……意識を手放した

『……いきなり、現れたが、どうする？ 右の』

『おそらくは修行者なのだろう。気絶しているだけのようだし、ほうっっておいても良いのではないか？』

門に付けられた鬼の面がそんな会話をしているのを、意識を失いながら聞いているのであった。

そして一時間後

「思い出したあああああっ！！俺の名前は神木明人だ！！」

H×H世界に移動する際に記憶を失った神木明人、今まで名前だけはどうしても思い出せなかった、その少年はあまりにもあっけなく思い出す。

「……………何処だここ？」

首を傾げて周りを見てみると、険しい山の中……………そして目の前には鬼も面が付いた門……………

どこかで見た気がする

前世の時のしかも小学生時代の作品で……………その当時はあまり興味が無かった作品だが……………大人になって読み直してみるとかなり面白かった事を思い出す。

「GS美神」

ぼつりと呟いて、思い出す。

そう、ここはGSの世界だったのだ！！そして、目の前にあるこの門は……………鬼門！！ 霊的修行の最高峰と呼ばれる修行場、妙神山の門番、鬼門！！

すごいぞ、強いぞ鬼門！！

でも、基本、雑魚キャラ鬼門！！

あの、鬼門か！！

「はじめまして、神木明人と申します」

立ちあがってお辞儀をする明人

『『これは、これは、ご丁寧に』』

お辞儀を返す鬼門、その門が開いた。

『あら、お客様？』

門から出てきたのは一人の女性。日本の龍のような角を生やし、剣を脇に差した、20代くらいの女性である。

「おやおや、これはかなりの美人さん。始めまして神木明人と申します。よろしければ中でお茶でも一緒にいかがですか？」

そう言っつて明人は女性の肩を抱きながら中に入ろうとする。

『私に無礼を働くと……仏罰が下りますので注意してくださいね！』

……うゝむ、怖い人だ。ちょっとした冗談なのに。

いつの間にか10m近く、距離を話している明人なのであった。

『！（へえ、手加減していたとはいえ、私の初動の前には逃げていた。かなりの危機察知能力ですね）』

女性、小竜姫？がそんな事を考えていると、明人は首を傾げながら問いかける。

「それはそうと、ここは妙神山で良いんですか？」

まあ、十中八九そうだろうとは思っけど、一応ねえ

『ええ、その通りです。貴方は修行者でよろしいですか？』

「はい。ただ、紹介状などは無いのですが大丈夫でしょうか？」

『構いませんよ。その場合は鬼門の試練を受けてもらうことになるだけです。』

あれ？ でも紹介状を持ってた美神も鬼門の試練は受けてたよう
な気が……

『鬼門、この者に試しを』

小竜姫？がそう言うと、門の左右にある鬼門の体が動き出す。

「えっと、こいつらを倒せば良いので？」

『はい』

一応、真正面から戦ってみるかな……この世界での実力も分かる

だろうし……

とりあえず

オーラ……いや、これからは靈気か……靈気を拳に纏わせ、放つ

靈光弾・散。H×Hの世界に何故か居た幻海から習った技である。

オーラを拳に収束させて、それを一方向に拡散させる技だ。すこし苦手な技だが、これでだめなら体術でこけさせよう。

『『がつ……は……』』

左右の鬼門がシンクロしながら崩れ落ちた。

……雑魚だわ。こいつら

『……二秒！ 新記録ですね。しかも正方向でとは。戦闘面で教える事は無いように思えますが？』

「んじゃ、それ以外の教えてもらえます？ 占いとか、呪符とか教わりたんですけど？」

『……はあ、そんな基礎的な修行で良いのですか？』

明人の言葉に疑問顔の小竜姫。その言葉に明人の顔が不機嫌になった。

「あん？」

『え？ あの？』

「基礎を馬鹿にするとは、それでも武神か？」

『ッ！？（こ、この私が人間の気迫に圧されてる！？ いえ、これは……霊気の重圧？ 私よりも低いですが、人間にこれほどの使い手が居たの？）』

驚愕の表情を浮かべる小竜姫になおも不機嫌そうな顔で詰め寄る明人。

『いえ、私は基礎を馬鹿になどしてませんよ！？ ただ、ここに来る修行者はほとんどが一気に力を得ようとする人ばかりだったものですから』

「あ、そうなんですか………すみません。なにやら勘違いしていたようです」

『いえ、分かればそれで……（しかし、先ほどの力……その若さで、それほどの力を得るのは生半可な努力ではすまないはず……）』

小竜姫は明人の顔を見てそんな事を考えるが……先ほど、気を抜けば威圧される程の霊気を出した時とは違う。のほほんとした明人の雰囲気

『（ま、いつか）』

と思うのであった。

『それでは、まずは着がえをこちらでしてください』

そう言われて着がえを済ませる。その服装は中華風の修行衣で、結構動かしやすい服装だった。

「というか、なぜ、中華風の修行衣なのに、この脱衣所は日本の温泉っぽいんだ？」

「ん〜、着慣れてないから、落ち着かないな」

しかも鎖帷子や手甲も外しているので落ち着かないことこの上ない。

『それで、どのような修行になさいますか？』

「とりあえず、基礎的な知識かなあ。結界符とか自作できるようにになりたい」

『なるほど、いつまでにと言った期間はありますか？』

「そう言えば、原作って始まってるんだろうか？」

「期間は……出来れば短めが良いですね」

まあ、時期は分からないから、早いうちに習得しといたほうが介入は楽だよな

『では、ハードコースで行きましょう。こちらです』

そう言って、案内された先は原作でも登場した修行場所……

風呂場への出入り口のような場所をくぐった先が、地平線の見える荒野っぱいところとか……シニールだよなあ

そして扉の目の前には法円（魔法陣のようなもの）があり、そこを踏めと言われる。

『ここでは直接、魂に知識を植え付けることが出来るんです。その法円を踏みなさい』

そう言われ、法円を踏むと影法師シヤトウと呼ばれる明人の霊格や霊力を取り出した分身が出てくる。

黒いシルクハットにタキシード、その手には素敵なステッキ……つまりんだジャレだ。

「しかし、こんなんじゃ戦闘出来るのか？」

『ではまず、剛練武ゴレム！』

そう言って出てきたのは、原作でも登場した。岩の体を持った一つ目の剛練武くん

あれ？ これって霊的防御を上げるんじゃないかなかったっけ？

『では、始め！！』

『ウオオオオオン！！』

剛練武くんが、吠えると突進してくる。

しかし、こっちは武器なんて……ステッキだけなんだが？

「とりあえず、相手の動きは遅い。組伏せる！！」

影法師は突進してきた剛練武くんの側面に回りこむと腕を掴み足を払う。その勢いを強めるために相手の背中を押す。

腕を肩で支えていた状態で押した為、剛練武くんの腕が折れた。

「やはり、石の鎧では関節技には耐えきれんな」

『今のは……（靈気を相手に流し込んで、靈脈を乱し、力が入らない状態にして折った？）』

「まだやる？」

剛練武くんは腕が折れると煙となって消え、影法師へとまとわりついた。

そして影法師の姿が変わる。シルクハットに、金色の文字の様なラインが描かれる。更には袖や裾、襟などにラインは描かれた。

『これで、あなたの影法師に結界に関する知識が刻み込まれました』

「おお、そりやすこい」

ぱちぱちぱちぱちと手を叩いた。

『それじゃ、次の試合を始めますけど、良いですか？』

「大丈夫ですよ」

『では……禍刀羅守！^{カトラス} 出ませい！！』

そう言って出てきたのは前足と後ろ脚が刃な、危ない奴。禍刀羅守だった。

グゲゲゲゲとか言ってる。

しかも近くにある岩を切り裂いてドヤ顔をかましてきた。

「……アホだな」

そんな事を言っていると怒ったのか、始めの合図もなしに戦闘を開始して飛びこんできた。

「しかも短気とは、かなり、アホだな」

明人の影法師がステッキを下から上へと振り上げた。

そのステッキは禍刀羅守の顎にクリーンヒットし、禍刀羅守がのけぞる。

ステッキを一端引き、禍刀羅守の胴体に突きを放った。

仰け反り、後ろ脚での二本立ちになった禍刀羅守は胸に突きを打ち込まれて後ろに倒れてしまう。

そのまま起きられずに第二試合終了

禍刀羅守は煙となって明人の影法師のステッキへと吸い込まれるのであった。

ステッキがさらに素敵なステッキへと変わる。そして左目にはモノクル、そして黒い手袋が手に入った。

『これで、解析が刻み込まれましたね（しかし、これほどあっさり
と、あの二体を倒してしまうとは……驚きですね）』

「しかし、実感が湧きませんねえ」

『それはそうでしょう影法師があなたの体に戻らなければ、知識は
手に入りませんから』

「なるほど」

『では……これで最後です。私と戦ってもらいますよ』

……あゝ、やっぱり？

原作でも思ったけど、これクリアした人いるのかなあって思うんだよ。

最後が小竜姫さまとかねえ……いや、まあ、勝てるとは思っよ？
超加速さえ使ってこなければだけどな……

小竜姫の角が光、その姿を影法師へと変える。

そして舞台の上に立つ小竜姫……

「さて……どうしたものか……」

そんな事を言いながらも、靈気を練っていく。

『素晴らしい靈気です。下級神魔では手も足も出ないでしょう』

小竜姫もまた剣を構えた。

『では、始めましょう!~!』

そう言って剣を振るってくる小竜姫………なのだが

キーン

「?」

キーン

あれ?

『防戦一方では勝てませんよ!! 打って来なさい!!』

……えっと

『防御に徹する気ですか!~?』

キューン!! カラン、カラン

『え?』

「……」

ステッキを回して小竜姫の剣を絡め取り、喉元にステッキの先を突きつけた。

「……手加減がすぎますよ？ 小竜姫さま」

『この舞台の上では、あれが精いっぱいです。ですが、ここまであっさりとやられるとは思っていませんでした……』

……なるほど。この舞台じゃ、小竜姫さまの能力はかなり制限されているらしい。それこそ、人でも勝てる程度には……

まあ、そうだよなあ。超加速って、弾丸でものろのろ進む程度の速さになるのに……横島の影法師、追いつけたしなあ

「それで、最後はどのような能力なんです？」

『はい、知識です。基礎ばかりですが、組み合わせたり、道具を使用することによって、応用、発展させることが可能になりますよ』

「へえ」

でも、道具ってどうやって手に入れるんだろ？ 作れるのかな？

『では、影法師を戻します。脳に負担が掛かるので気をつけてください』

「へ？」

「なんなんでしょうね、この包帯の巻かれた像は……かなり、不気味なんですが……」

バンダナの少年……横島忠夫はそう言うが、生きた女性、美神令子は門を叩きながらハツタリと言う。

その言葉と門を叩いた事で怒りだす左右の鬼門

かなりカルシウムが不足しているようである。

その鬼門が美神に対し、未熟者と罵り、門を開きはしないと云った数秒後……

「あら、お客様？」

と小竜姫が開け放つのであった。

美神令子と横島忠夫、そして幽霊の少女おキヌの三名は鬼門の試しを受けた後、小竜姫の案内で着がえを済まし、修行場へと案内されたのであった。

そこには少年が大の字で眠って居た。

「か~~~~~」

「なに、これ……」

『彼は先ほど、ハードコースを受けた方ですよ。かなりスジの良い方でしたが、おそらく疲れて眠っているでしょう、そっとしておいてあげてください』

「はあ……（なんだ、こんなガキにも出来たんなら楽勝ね）」

「ん〜、イケメンのよ〜な、イケメンじゃないよ〜な……打つべきか、打たざるべきか……」

美神は不穏な事を考え……横島は五寸釘と藁人形を手に何やら悩んでいるのであった。

そして、美神が、剛練武と禍刀羅守を倒し、小竜姫との闘いが始まった時。

美神は、禍刀羅守戦で出てきた横島の影法師による奇襲を仕掛けたのだった。

しかし、その事によって、試合は中断、再試合を行う事となる……はずだったのだが……

横島の影法師が、手柄が水の泡になるのを避けるために、猛抗議、小竜姫の着物の中に入って、逆鱗に触れてしまった。

龍化してしまった小竜姫は、辺り一面を炎の海へと変えてしまった。

「「ぎゃ〜〜〜〜〜〜〜〜」」

横島が、燃やされ……もう一人、大の字になって眠っていた奴まで燃やされた。

「あち、あち、あちい！！　つてここどこ！？　なんで火の海！？」
少し焦げた状態の明人は首を左右に振りながら現状を確認する。

見渡す限り、火の海。そして一匹の龍……そして透けた少女にバ
ンダナを巻いた男と亜麻色の髪の女性は、多大な霊気を含んだ炎に
よって出来た空間の歪みに穴をあけて、逃走して行った。その後を
追って龍が飛んでいく。

空間に穴が出来たことで、全体に亀裂が入り始める。

そして世界が砕け、現実の世界が顔を出す。

しかし、そこでは龍となった小竜姫が暴れまわっていた。

「……止めとくか」

このままでは霊気負けしてしまうので懐からタバコの箱を取り出
した。

タバコを一本取り出して火を点ける……

「よっしゃ、行くぜ！！」

大地を蹴り、小竜姫の下へと走って行く。

そして明人は……跳んだ。

結界に体当たりをしている龍の横っ面に蹴りをかます。

明人は地面に降り立つと挑発する。

ちよいちよいと動く指先を見て、唸り声を上げる龍。

しかも理性がどつかに飛んでしまっている為、真正面から馬鹿正直に突っ込んできた。

「ちよつと痛いだろうけど、我慢してくれよ……」

指先に靈気を収束させ……

「靈丸！！」

撃ち放った。

十分に収束し、凝縮された靈丸は龍の眉間を打ちぬいた。

どろんと煙を立てて元の姿に戻った小竜姫は眉間に怪我をしながら気絶するのであった。

脅しには屈しません!! (前書き)

サブタイトルに意味は無い……あんまり

脅しには屈しません!!

『ああっ!? 誰がこんなひどい事を!?』

気絶から目を覚ました小竜姫は現状を見て驚いていた。そこに現れた美神が呆れた表情で、言い放つ。

「あんたが全部やったのよ!」

その言葉にうろたえる小竜姫、そしてさらには思った事を……自分の弱みを口から出してしまっていた。

『こっこんな不祥事が天界に知れたら……私……私、どうしよう!』?

その言葉に何かを思いつく美神……

「大丈夫よ! こっそり直せばバレないわ!」

そうして原作同様……お金で力を手に入れる美神なのであった……

……
んじゃ、俺も……

「しかし、猿神ハヌマン老師が居なくてよかったですねえ」

『はい、本当に良かったです』

「実は今度、スペシャルハードコースを受けようかと思うんですが……その時の話題が出来て良かったです」

『え？』

ギリギリと錆びたブリキの様に首をこちらに向ける小竜姫。

「俺は、そちらの方とはなんの関係もありませんし」

ん〜、脅しとかって難しいなあ……でも遠まわしだと気づかないような気もするんだよなあ

「なのに、龍化している小竜姫さまを止めた俺にはなにもなしか〜
(棒読み)」

『あうあうあうあう……あ、あ、あ、あ、あ、あの何かほしいモノはございませんか？ あ、そうだ！！ えつと確かこちら辺に……』

自分の体よりも大きな瓦礫を投げ飛ばしては、何やら取り出してきた。

『止めてくれたお礼にこれを差し上げます！！』

そう言って差し出されたのは壺……その中には小判がざっくざっくでした。

「え〜、そんな、受け取れませんよ〜（ひたすら棒読み）」

『そ、そんなことおっしゃらずに……これは私からの誠意ですか

らー!! あ、あとこれもつけちゃいます!! 私が符を作る時に使
用して居るものでして、今のあなたであれば十分に使いこなせるで
しょう!~!~!」

……別に増やさせるつもりはなかったんだけどなあ。でも、この
世界のアイテム高そうだし、いつか

「そこまで言うのでしたら、しょうがないですね(あくまで棒
読み)」

『ええ!! その通りです!! しょうがない事です!!』

そっぴや、この話し方、六道っぽくないか?

てか、美神さんが引いてらっしゃる

「では、ありがたく頂いておきます。いや、実は無一文だったん
で助かりました」

『いえいえ』

顔が引きつっている小竜姫なのであった。

ところ変わって、唐巢神父のぼろっちい教会

「地獄の沙汰も金次第って言うし……神様だって……ね」

妙神山での出来事を話し終えた美神がウィンクをして、そう締めくくった。

「いやはや、地獄の沙汰も金次第ですか……よく言ったものですね」

「「なっ!?!」」

二人の視線の先、そこにはいつの間にか神木明人が座ってお茶を飲んでいた!!

「あ、お茶のおかわり要りますか?」

「なんだって、あんたがここに!? とうかがどっから湧いて出た!?!」

「ひどい、人を虫みたいに……最初から、ずっと居ましたよ。お茶を淹れたのだって俺なのに……」

まあ、絶で気配は消してたけど……

「……それで、いったいなんの用よ? (最初からいた? くっ……: そう言えばお茶を淹れた記憶が無いし……先生も席を立った覚えがない……: と言うよりも、ここにお茶っぱなんて存在しないわ!!: なんてその事に気づかなかったのかしら!?)」

「あ、始めまして神父。神木明人です。今後ともお見知りおきを」

「これはこれは、ご丁寧に。私は唐巢和宏と申します」

とりあえず、自己紹介はしておかなくちゃね

「だあああ！！ いったい何の用なのかって聞いてるでしょうが！？」

美神がこけながらも話を続けてきた。さすがは椎名作品の人だ。コケっぷりが半端ねえ……

「ああ、そうでした、そうでした。実はお願いがあるんですよ」

「お願い？」

「ええ、実は俺、GS免許を持ってないんですよ。ですので、適当な依頼を流してもらえないかなあ、と思いついて……もちろん、仲介料など引いた値段で構いませんよ。1割くらいで、どうです？」

「……（私と先生の話を聞いていたってことは……これは脅し？でも、了承するのも、嫌だし……）仲介料8割なら、手を打とうじゃない！！」

……さすがはあの美神、がめつさがすげえなあ、おい

「そうですか……まあ、仕方ないですね。小竜姫さまのところにお茶でも差し入れして来ましょう」

「ぐっ……（やっぱり、脅し）仕方ないわね5割ならどう？」

「あ、神父お茶いりますか？ お茶菓子もありますよ」

「おお！！こ、これは最中……何年ぶりでしょうか」

「……(む、無視ですつてえ!!)……………ううう、よ……………3割!
!」

「ああ、下がったんですか？ 5割で良かったのに。いやはや3割
ですか。美神さんの身を削るような思い、確かに聞かせてもらいま
した。俺の口が滑ることは無いでしょう」

「……………くう」

なぜか、美神は悔しがるのであった。

別に5割で、良かったんだけどなあ……………だってあの美神だよ？
それ以上ふっかけたら怖いじゃないか？

「では、用事も済んだので、俺はこれで……………では失礼」

試しに作った閃光符が、部屋の中を白い光で埋め尽くす。その隙
に絶で気配を消して、窓を開け外に出て行った。帰り際、ちゃんと
窓は閉めました。

さて……………あとは事務所を開かないとなあ

あ、その前に戸籍、偽造しないと……………厄珍堂で作れそうな人紹介
してもらおう

……厄珍堂で作れたよ、偽造戸籍。

まさか、一日もかからんとは……驚きです。値段は高かったけど、紹介料を含めて作った金額よりはギリギリ安かったから良いか。

エンゲージの契約を交わしてるから半端な仕事もしないだろうしな。

エンゲージの契約……GS美神の3巻でエミが横島にサインさせた契約書である。

まあ、高い金を払えば腕は確かみたいだし、なんの問題も無かるうて……

あとは、靈的不良物件でも探して事務所だな

その前に仕事用の携帯電話を購入するべきだな。

この世界に来て……わずか3日で一国一城の主となった。神木明人なのであった。

次回……『開店、神木探偵事務所』をお楽しみに

脅しには屈しません!! (後書き)

ひたすら、脅しの回……こんな主人公だったかなあ？

まあ、職場とか学校とかプライベートだと性格や雰囲気が違う人なんて、いっぱいいるし。根っこが同じであれば良いよね

むしろ、それが普通だ!!! だからこれは言い訳なんかじゃないんだい!!

では、次回も、ま・た・見・て・ねえ

うえ、気持ち悪……

始めて幽霊に会いました

都内にある、とあるテナント……

大通りから一本だけずれたその場所にそこは存在した。

綺麗な外観でありながら、なぜか薄気味悪いそこは……人を寄せ付けない。そんな雰囲気を持って、存在していた。

一階部分には喫茶店の設備が整っていないながらも無人……

埃がかぶり、『人間』の気配はない。

明人は凝……この世界では霊視と呼ばれる技術を使って辺りを見回した。

霊気の残りかすの様なものが至る所に散りばめられている。

しかし、この場に、明人が探すモノの存在は無く、明人は一度外へ出ると二階につながる階段を上って行く。

そして二階の扉を開き、中に入って行った。

まず閑散とした事務所部分を視る、そして奥にある部屋へ、そしてキッチン、トイレ……やはりここも霊気の残滓は残っているがその根源は見つからなかった。

そして三階……ここは住居スペース、居間、洋室、和室、キッチン

ン、風呂とトイレは別と言っかなりの物件である。

そのすべてを視て回ったが、ここも残滓しか発見出来なかった。

明人は最後の階段を上る。

屋上へと続く階段だ。

……その場所に『彼』は……存在した。

黒の上下に白い羽織……腰に刀を射した……
『サムライ
彼』

『ここになに用か？』

調べてみたところ……この場所には首塚があり、この建物を建築する際に取り壊してしまったのだそうだ。

それ故に、よなよな『彼』は彷徨い出るのだと言う。

借り手も買い手も見つからず、値段は下がっていき、この物件は3000万にまで落ち込んでいた。

「意思があるのか、見たところ……かなりの時間を幽霊として過しているようだが……なにか心残りでもあるのか？」

『彼』の事を調べて分かった事は……600年も前に生き、当時最強と呼ばれた存在だった。

しかし、普通であれば……600年も生きて居ながら意思がある
事事態が不思議な事である……

明人は……『彼』に対する興味がふつつつと湧きあがってくるのを感じ、そんな事を聞いていた。

『心残り……』

『彼』はそう、ぼつりと呟くと……涙を……頬に伝わせた。

『ああ……あるとも……』

そして『彼』は言う。

『女として生きたかった~~~~~!!!!!!』

はい？

「は？」

ちよつとまで……確かに一目見たときから女顔だとは思った。し

かし……身長は180と……俺と同等。昔であれば、その身長だけで化け物と言われても仕方ないくらいの身長だ。そして真っ黒な黒髪はショートカットよりも短く、ベリーショートヘア……さらには真っ平らな胸……いや、慎ましい膨らみも見えるが……着ている和服の弛みによるものにも見える程度……

そもそも、伝承では百人切りを行った最強の鬼人の男だったはず……

『ううう……私を生んだ時、母は病に倒れ死に別れ、父に捨てられた私は女であることを隠して生きていた。私を殺そうとした盗賊から刀を奪い……いつしか武士として名が売れていった……大名に仕えることも出来たのだ……だが、私が女である事がばれると……その大名は……私に……私に、不埒な真似を強要してきたのだ……まあ、切り捨ててやったがな』

いきなり表情が変わったな。おい

『だが、その所為で……立場を追われ、百人切りなどと言う。馬鹿な事をしてしまったが……まあ、それは良い』

良いんだ……

『とにかく!! 私!! 女として甘酸っぱい恋とか!! 愛とか!! してみたいのだ!!』

「はあ……」

『と言う訳で、最初はお友達から始めませんか? (ハスキーボイス)』

『

「じめんなさい」

『即答!』

こいつ、おもしろえ

「冗談だよ。まあ、友達くらいなら問題ねえ。だが恋とか愛だとか、俺は全く分かん。好きって感情は分かるんだがな。だから、これだけは言える。俺、お前の事、好きだ」

そう言うてにかつと、笑う明人。その表情とその言葉を視て、聞いて……

『……………』

『彼女』は顔を赤らた。

「神木明人だ。これからよろしくな」

夕日を背景に……明人は笑う。前髪に隠されていた瞳が露わになりながら、目を細めて、笑っていた。

『真だ。私の名は真マコトと言う。こちらこそ、不束者ではあるが、よろしく頼む』

「おう、よろしくな。真!」

こうして、ひとり……事務所のメンバーが増えた。

さあて、次こそ、神木探偵事務所、設立だ！！

T
O
B
E
C
o
n
t
i
n
u
e
d

始めて幽霊に会いました(後書き)

しよっぱなからオリジナルキャラです。

正直、横島のキャラが良すぎて、ヒロインかつさらえないんで、新たなキャラを作り投下しました。

まあ、新しいと言っても……シャーマンキングの阿弥陀丸と前々世界、史上最強の弟子のキャラ、フレイヤことを足して2で割ったような割って無いようなキャラですがね。

バイトを雇いました(前書き)

つまらない小話ですが、どうぞ……

バイトを雇いました

事務所開業を開業してから、かれこれ一カ月ほど……

いやはや……時が流れるのは早いモノである。

それまで明人が何をしていたかと言うと……この建物の浄化作業を行ってました。

掃除をして、屋上に祠を建てて真の住み場所にしておいた。

六百年も生きて？居ながらも意識を保っているしつこい性格の幽霊なので、祠を用意するだけで、ここら一帯の土地神クラスの力は得られることだろう。

ついでにその祠を基点に結界を張って、陽と陰の気のバランスもとれるようにしておいた。

結界に関しては、いろいろと混ざっており、ほぼオリジナルになっている。

和洋折衷どころの騒ぎではなく、術式の分かるものが見たら、異端審問にかけられるであろう事間違いないと言った具合に混ざり合い溶け合っているのだ。

まあ、小竜姫からもらった知識が、和洋に留まらず様々なものだから仕方のない事なのである。

ちなみに明人の使える結界術は大きく二種類、術式結界と簡易結界の二つだ。

術式結界はその名の通り、術式を刻み、その術式の効力を持って展開する結界の事だ。そして簡易結界……これは、明人の霊力のみで展開する結界だ。

その二つから更に分けることも可能だ。例えば、簡易結界だと薄い膜状のバリアの様な結界と、一点に収縮させた板（ぶつちやけ、横島のサイキックソーサ）の様な結界に分けることができるのだ。

と、話が逸れた……

兎にも角にも準備を終えた明人は……応接用に用意したソファに横になってダラダラしていた。

「暇だ」

まだ出来て間もない探偵屋に依頼など、来ないのだ。むしろ宣言さえもしていないのだから来る方がおかしい

更に言う……美神から横流ししてもらっている依頼だけでも、なんの問題もなかったり……

「……一晩で百万とか、ザラだもんなあ」

美神は道具使いの為、赤字になりそうな依頼を明人に渡している。しかもピンはねしてから……さすがは美神だ。

『明人殿、お客でござるよ』

屋上に居た真が天井をすり抜けながらそう言ってきた。

「ん？　もしかして探偵事務所、初の依頼か？」

『そこまでは分からんでござるが、赤いバンダナを付けた少年でござった』

ちなみにこのござる口調……これが彼女本来の言葉遣いだ。

「赤いバンダナ？　……なんで、あいつが？」

明人がそんな事を呟いていると、コンコンと扉がノックされ、明人と真が扉を見る

「開いてるよ〜」

明人は寝転がっていたからだを起こしながら、ノックに答えた。

キィと音を立てて扉が開き、少年が顔を出した。

「ども、ども〜、横島忠夫と申します〜」

何処ぞの芸人が舞台に出てくる様に、お辞儀をしながら手を出して入ってくる横島忠夫

「美神のところの助手だっけ？　一体なんの用？」

「いや〜、実は美神さんからこの書類を届けるように言われまして」

つまりはタダのお使いである。

「ん、どうも……なんだ、ただの依頼じゃねえか。連絡してくりや良いのに」

書類を受け取ると、ぺらぺらとめくって見てみるが、大した依頼ではなかった。C級霊の排除だそうだ。

「んじゃ、俺はこれで、失礼しまゝす」

そう言って立ち去ろうとした横島の首根っこを掴んで止めた。

「こいつって自給250円だったよなあ……不憫すぎる」

「まあ、これも何かの縁だ。バイトでもして行け」

「いやじゃ〜!! 男の上司なんてつまらんわ〜!!」

「二千円くらいは出せるけど」

「やらせていただきます!! 何をお持ちすれば?」

荷物持ちが様になってんなあ……しかも変わり身が早いなあ、おい

「んにゃ、荷物なんてねえよ。お前さんには……」

「いやじゃ〜!! 肉の壁はもう嫌じゃ〜〜〜!!」

どうやら、過去のトラウマでもよみがえったらしい……

「最後まで聞け、お前さんには、これの写ししてもらいたい」

「はい？」

明人が言った『これ』は……明人が作った符だった。

閃光符や爆雷符など、様々である。

「とりあえず、この符を帰ってくるまで書いといてくれ。一枚書いたら十分休憩して良いからな。むしろ休憩しないときついだらうけど」

そう言っつて筆を渡す明人。

筆には幾何学的な文様が削りこまれており、持つだけで靈氣が持つていかれる仕様となっている。

つまりは素人でも作れると言っことだ。

「あ、一枚作る時は一気に書いてくれよ。一筆一筆、魂を込めるよ
うにな」

「うへ〜い」

「一枚二千元」

「うつつす！！ 不肖、この横島！！ 魂を込めて書かせていただきます……！！」

「んじゃ、任せた〜」

「いってらっしゃいませ〜」

んじゃ、ひと稼ぎしてきますかあ

仕事をあつという間に終わらせ、帰ると……そこには精根尽き果てた様な状態の横島が居た。

ソファに横になってびくびくしている。

「休憩せずに書いたのか？ 無茶するねえ」

そう言いつつ、出来上がった符を見てみる明人。

書かれた符は全部で十枚程、たった1時間で書いたにしてはかなりの枚数である。

だが、実際に使えるのは八枚程だ。

「ふむ、こここの部分が間違っているな。あと、ここも……まあ、この二枚は五百円だな、のこりの八枚は二千円で買い取ってやろう」

「マジツすか！？ と言うことは……五百円が二枚と二千円が八枚だから……いい、一万七千円!？」

そう言った後、あれかって、ああ、あんなことも、出来ちゃうか

もろなどと、ぶつくさ言っている横島に明人は財布から一万七千円を取り出し、渡した。

「と言いついで、ほい」

「ありがとうございます！　また来ても良いっすか！？」

「良いよ」

「ありがとうございます！！」

そう言って土下座してきた横島

「そついや横島くん？　なんだって、今日はお前さんが来たんだ？」

「ああ、その事すつか？　なんでも美神さんの占いで、俺が神木さんのところに向かった方が吉って出たみたいっす。あと、横島で良いっすよ」

なんだ……そんなオチかい

バイトを雇いました(後書き)

山も無ければ、谷も無い……

次回こそは、探偵事務所のお仕事を書きたいなあ

犬探しと浮気調査、どっちにしようかなあ

神木事務所、開いています

横島をバイトとして雇ってから、更に一カ月……

探偵事務所としての仕事も軌道に乗り、週に三〜四件程、依頼が舞い込むようになっていた。

基本、口コミで……

式神（魑魅魍魎を込めた意思を持たない地霊）を使つての浮気調査（式神と意識をリンクさせることで視覚や聴覚を共有するなど）や八卦盤での探し物（犬探しや猫探し、というかペット探しとか、紛失物の探索）など……細かい能力で、生計を立てている

まあ、依頼料なんて、二万〜五万程でしかないが……

それに裏の仕事も舞い込むようになっていいる。警察からの依頼でヤクザ者の事務所の潜入調査（基本、調べ方は浮気調査と一緒に）、犯人探し（ペット探しと一緒に）だったりとかちらも幅広い……こちららは百万〜千万の依頼料（口止め料込）となっているので、こちらの方が本命で、前者の方はタダの趣味だったりする。

『というか、霊能の無駄使いではないのではござらうか？』

「仕方ないだろ、俺はGS資格、持ってないんだ。モグリでやるしかないし、ぶつちやけ、怪我とかしないで楽に稼げる仕事なんだぞ」

『それにしても、拙者との相手ではかなり、力が入っているように感じられるが?』

真との相手は週一程度だが、やっている。正直、彼女は強い。技術で言えば、俺よりも、かなり……

「……それは、まあ、アレだ。せつかく、身に付けた技能を錆つかせたくないとか、そんな理由だ」

とは言いつつも、力が入る理由は別だ。このござる侍……真に技術で劣っている事が悔しくて仕方ないからだ。

それでも才能はある方だと、自負しているし、史上最強の弟子世界の達人達と戦い、勝つことができると思っっている。

だが、それは……残念ながら、力技……と言うよりも霊気、念能力によつてだ。

霊気や念を気と見て、武術と言うことはできる。しかし、それでも技で負けている事には変わりないのである。

拳を握つて殴る。それだけでも、あの世界の達人達とは格が違う。

オーラ（霊気）を纏つて殴れば、同じ結果を出せるだろうが……相手が同程度のオーラ（霊気）を持っていれば、こちらの負けなのだ。

ならば、技を昇華したいと思うのは自然な流れだろう。

「いつか、技だけで勝つてやる」

ぼそり、と決心を言葉にしながら、今までした仕事の書類の整理を進めた。

『何か言っただいござるか？』

「何も言っただいねえよ」

『？ そつでござるか？』

「ござる侍はそつ言つと、事務所に取り付けられているテレビへと視線を戻すのであった。

この、テレビっ子め……

「ちわっす、バイトに来ましたっ!!」

「今日も来たのか……今日はこの符を頼む」

「うっす!!」

横島はほぼ毎日のようにやってきては、今では指定された符を十枚ほど書いて、美神のところへと向かっている。

前に、美神のところは大丈夫なのかと聞いたところ、どうやら、この場所は学校と美神の事務所の間にあるらしく、一枚くらいは余裕で書けるからだそつだ。

そつ、最初は一枚だったんだが……いつしか、一枚が二枚になり、二枚が三枚に……と、今では30分で十枚は書けるようになったの

だ。

いやはや天才だな、本当……

まあ、最近は符の格を上げること枚数を増やせないようにしていたりするが……それでも日に二万の仕事、それも30分で終わりなどと言うバカげた仕事（横島だからこそできるのだ）である。まあ、このまま行けば、符一枚でお釣りが来るような物も書けるだろうがな……売らないけど

「……二万、二万　アレかって、これ買って〜」

まあ、買うのはAVとか、そこらへんだらうがな……ちなみに、ソープへは行かないらしい。愛が無いのはダメだとの事

そんなもんかねえ

というか、惚れ薬や文殊で惚れさせようとした男がよう言ったもんだ。まあ、金なんてのは人の心を豊かにさせるからなあ

「あ、そっぴや、明人さん」

基本、明人は名前で呼ばせている。

「ん〜？」

「実は、うちの学校に机妖怪の愛子って奴が居るんですけどね」

「へえ、最近の学校はそんな奴もいるのか、他にもいるのか？　てけてけとか」

てけてけとは下半身の無い幽霊のことである、手で歩く音がテケテケと聞こえるから、そう呼ばれるようになったんだ

「いや、そりゃ知らねえっす。それよりも愛子なんですけど、学校に馴染んでいつの間にかやら、女友達とか作って、外に遊びに行くようになったんですよ」

「ほお、そりゃ、すごいな」

「でもそいつ、いつもいつも机を背負って移動してるみたいなんですよね」

「まあ、机妖怪だしなあ。書類の整理終了つと、横島、お茶は」

「あ、頂きます。なんとかありませんかね？」

机の事だろう……まあ、ぶっちゃけ……

「なんとかかなると思うぞ」

「ですよねえ、美神さんにも聞いたっすけど……っつて、なるんスカ!?」

明人が小型の式神を飛ばし、用意したお茶を飲みながら横島は、明人の言葉に驚きながら、茶を噴出した。

キタネーな、おい

「ちょっと、待ってな、えっと……アレは……」

そう言いつつ、席を外し隣の部屋へと消えていく。その間、横島は噴出したお茶を雑巾で拭きとっていた。

「これだこれ」

横島が掃除を終えた頃、明人がそう言いながら持ち出してきたのは、バインダー式のファイルだった。

そのファイルを開いて二枚の符を取り出す。

「この符は、二枚で一組でな。こっちの符を張ったモノの代わりにこっちの符が身代りになる事が出来る符だよ。効果は壊れるほどのダメージを受けた時までで、張つてある間はその張っている物から力を吸いだし、ほぼ半永久的に効果は続く」

「おお！！ そりゃすごい！！ でも、そんなすごい符だと、高いんじゃない？（美神さんが買ってくる物だと、一枚100万円とかの札もあるしなあ。ここで、稼いだ金は、ほとんど、AVや高画質ビデオデッキを買うのに使っちゃったし……）」

「値段は……つけられんな。俺が書いたものだし……まあ、だいたい三〜四千くらいじゃないかな？」

「三〜四千円っすか？ ちょっと高いっすねえ」

三〜四千万円だがな……まあ、でもそれを言つと、自分で書いた符を売りに行きそつだよなあ、こいつ。まあ、勘違いさせておこつ。

それに、この符は……俺が書いたものだが……書くのに一晩掛か

った代物である。

……いや、まあ、外気吸い取り君は使ってなかったからだけど。使ってたら、一本吸いながら二組程は作れるだろう。

「なあに、毎日のように来ては、書いてくれてんだ。これくらいやるよ」

まあ、今まで書いた分を計算すれば、軽くとは言わないが、そんなくらいの金額の分くらいは書いてもらってるしな。

ちなみに現在、横島が書いているのは爆雷符（一枚で50万相当の破魔札と同等の破壊力を持っている）だったりする。

ただ、符には独特な癖が存在するので、現代のGSでは扱いは難しかったりするので、売れないのだがな。

「んじゃ、ありがたくもらっておくっす」

「おう、持ってけ持ってけ、女の子がどうなったかは報告に来いよ」

「了解っす!!」

そう言っつて、横島は立ち去っていった。

その机には十枚の爆雷符……

どうやら、またも時間が短くなったようだ。

その翌日……キョンシーのように符を額に張った少女が街を徘徊していたという噂が流れたが……真実とは思いたくない明人なのであった。

別に、額じゃなくても良いんだけどなあ……

明人、死んでます

東京のとある路地裏にて……

「にゃ〜」

高級猫缶を貪り食っている、ロシアンブルーの子猫を抱きあげる
明人

「よっと……これで、依頼達成つと。あとは依頼主に連絡して受け
取りに来てもらわなきゃなあ」

そう言いながら携帯電話を取り出すと……

「げっ、電源落ちてるし……バッテリー切れか？ 仕方ない、事務
所に戻るか……って、アレは……」

裏路地から出ようと表通りに目を向けた時、丁度、その通りを一
人の少年が駆け抜けた。

『横島殿でござるな。なにかあったのでござるうか？』

横島は子供を脇に抱えながら走り抜けていたので、原作での事を
思い出す。

たしか、メドーサと初めて遭遇する事件だっただけか……

「ふむ、面白そうだ。真、この猫、事務所まで連れてってくれ、す

「こし遊んでくる」

それを見て、真は溜息を吐きながら、肩をすくめつつ猫を受け取った。

『まったく、明人殿も物好きでござるなあ』

「にゃう」

『おお、お主もそう思つか』

「にゃー」

会話が成立しているのはわからんが、そんな事よりも横島を追わねばな！！

なにより、メドーサに会ってみたいし！！

「んじゃ、行ってくら！！」

あっはっはっは、まってねえ、メドーサやい

『なんだかなあでござるよ』

そして明人が横島を追いかけ、辿り着いた先は……デパートの屋上だった。

どうやら原作と同じ展開らしい……

「よう、横島、何してるんだ？」

ワザとらしく声をかけてみる明人

「あ、明人さん……って、明人さんこそこんなところで何を
してんつか？」

ちなみにここは屋上プレイランド……子供向けのゲームや、ステ
ージやらが立ち並ぶ場所である。

『おい』

いやはや、懐かしい……そういや、昔（前世）はこう言うところ
で奇術の講演をしたもんだ。

いまじゃ、探偵だもんなあ……どこで道がずれたのやら

神木明人の前世での職業は奇術師である。作者も忘れていた設
定だ。

「なに、久しぶりにクレープでも食べたいなあと思ってな」

屋上の角にあるクレープ屋を指差して、そう言ってみた。

『おいと言っておるのが聞こえんのか！？』

「……で、この竜神のガキはなんだ？」

角を生やした少年の頭を無理やり撫でながら、明人は横島に尋ねる。

「え？ 竜神？ あ、そういや、そのツノといい、剣といい……小竜姫さまと同じ……」

その横島の言葉にうろたえる少年

『おっ……おまえ、小竜姫を知っておるのか！？』

「どうやら、小竜姫様の知り合いらしいな。とりあえず、横島は美神にでも連絡しておけ」

ちなみに少年は明人に頭を押さえているので、身動きを取ることができずにいた。

『い、いやじゃ……！！ 小竜姫の説教は過激なのじゃ……！ そ、そうじゃ……！ お主、金はほしくないか……？ 家来になれば好きになだけやってもよいぞ……？』

「え？ 嫌だ」

『……うわ……ん……！ 余はデジャブーランドに行きたいのじゃ……！ 行くったら行くのじゃ……！』

……退路が絶たれた為、完全に幼児化を果たした少年は駄々をこねていた

「はあ……仕方ない。デジャブーランドに行ったら。帰るんだな？」

溜息を吐きだし、そう言った明人に、ランランと目を輝かせて少年は起き上った……

「嘘泣きかい。明人さん、やっぱり、このガキ、美神さんのところに連れていきませんか？」

「まあ、美神のところに連絡だけは入れておくよ。今頃、この……ガキの事探してるだろうし……で、お前、名前は？」

『……なんじゃ、余を知らんのか！？ 余は天龍童子！！ 竜神族の王、竜神王の世継ぎなるぞ！！』

「ふうん」

『無礼者！！ 身分を明かした以上、頭を下げた殿下と呼ばぬか！！』

「はいはい、分かりましたよ殿下。とりあえず、美神の事務所に連絡しとくわ」

「了解つす」

………案の定、留守番電話に切り替わったので伝言を残しておいた。

「んじゃ、行くか……ってどうした？」

うずくまり震えている天龍童子

「どうも、すぐに小竜姫さまがやってくるって思ったみたいで、お

びえてます」

「なるほど……ほれ、行くぞ、天龍」

明人はそう言いながら天龍童子を持ち上げ肩車をした。

「む……う、うむ！　では東京デジャブーランドへまいるぞっ！
」

「おっ」

そうして、明人、横島、天龍童子の三人はエスカレーターへと向かって行き……

「アイタっ！……！」

天龍童子は頭をぶつけた。

皆さんも、肩車での移動には気をつけましょう。

なんやかんやとありながらも、下の階に下りていくと、デパートの出入り口に美神と姿を変えた鬼門二名の姿があった。

「い、いかん。あれは人間に化けているが鬼門の二人じゃ。このままでは連れ戻されてしまう!？」

「え？ あ！ 美神さんも……！！！」

天龍童子と横島が三人の姿を見つけて騒ぎ出すが、明人はその三人組みよりももう一組の方に目を向けていた。

「……では、逃げるとするか」

そう言っつて従業員用の扉をくぐる三人

「アイター！！！」

扉をくぐるときに天龍童子が頭をぶつけてしまい、その声で気づかれてしまった。

「だから、降りろと言ったのに」

「こ、ここで良いのじゃ！！ とにかく！！ 逃げるのじゃ！！！」

そうして三人から逃げていると、男の二人組が先回りしてやってきた。

「天龍、降りろ……横島、天龍を美神のところへ連れて行け、何やらきな臭くなってきた」

「は、はあ？ 分かったっすけど、いったい何が？」

「行け！！！」

いきなりシリアスになったので、展開について行けない横島と天

龍童子、二人は明人のその言葉と、先回りしていた二人が姿を変えたことで逃げ出した。

『ギシヤ
』

頭に二本の角を生やし、皮膚を恐竜の様に変える男たち……

『やはり魔族か!!』

後ろから追いかけてきた鬼門二人も、そう言いながら変化を解いて、鬼の姿を露わにしていた。

『『我らが相手だ!!』』

そう言って突っ込んでいく二人。天龍に向かってのばしていたちびっこい方の舌を抑える鬼門。

もう一人のひよる長いのが腕を伸ばして天龍を狙う。

その手を弾き、通路を塞ぐ明人

「悪いがここから先は通行止めだ。鬼門!! 五秒時間を……」

稼げ!! と言おうとした明人であったが、ちびっこい方がツノから光線を出して、鬼門二人を瞬殺していた。

使えねえ

『ふん、後は人間一匹、素直にあいつらが逃げる場所を吐くんだっ
たら、見逃してやるぜ!!』

「はっ、笑わせてくれる。貴様くらい、俺一人で十分よ!!」

明人が取り出したのは四枚の符、符に書かれた意味は結界。

「符よ!! 行け!!」

掛け声とともに飛んでいく符。四枚の符は、チビとひよる長を中心に四方に散り光の壁を生み出した。

「この符は中にいる者の力を使って結界を作り出す!!」

『なに、この程度の結界!! 俺様の光線で!! なっ!? ぐわっ!!』

チビがツノから光線を出すが反射し、自分自身に返ってきてしま

う。
「中に居る者がこの結界を解くには、符に限界以上の力を込めて破壊するか、符の使用者である俺が解くしか方法は無い!! 干からびるまでそこに居ると良い!!」

そして結界に背を向け歩きだす明人。しかしその背後にローブを着て、姿を隠した人物が突如現れる。

「なっ!!?」

突然現れたローブの男?は、明人の背中に霊波砲を放った。

「がっ!!?」

明人の背中から真つ赤な血が散る。

靈波砲の衝撃で吹き飛ばされていた明人は、地面をごろごろと転がって……地に伏した。

『イーム、ヤーム。遊んでいないで、さっさと殿下を追え。向かった先は美神という女の事務所だ』

そう言つと腕を振るつて明人が張っていた結界を砕くローブの男？

そのままイーム（チビ）とヤーム（ひよる長）の二人を連れ、さらに明人の頭を掴むと転移し、姿を消した。

明人、生きてます（前書き）

後篇

明人、生きてます

一方その頃、美神と横島、天龍の三人は……タクシーに乗り、事務所へと向かっているところだった。

天龍に事情を話し終える美神。

「そう言えば、なんだってあんたあの男と行動してたのよ？」

「あ、もしかしてやきもちっすか！？ 美神さん！？ やっぱり俺の事を~~~~~って、ぎゃ~~~~~!!」

いつものノリで飛びかかろうとする横島だったが、顔面にハイヒールをめり込まされ、沈黙する横島。

「まったく、あの男が事務所に居なかつた所為で、こんな面倒な仕事をしなくちゃならなくなつたつて言うのに……」

何やらお怒りの状態で、タクシーを降りて事務所へと歩いて行く美神、その後を横島は天竜童子を抱きかかえながら歩いて行った。

そして事務所の中へ入ると……

ヤームによって天龍童子を奪われ、更に突き飛ばされることで床に叩きつけられる美神と横島の二人。

「なんで、ここが!？」

床に叩きつけられた時に打った頬を抑えながら聞く美神に答えたのはイームでもヤームでもない、もう一人の存在。

『小竜姫が貴様に依頼をしていたのは知っていたのでな』

「くっ、（こいつ、ただの魔族じゃない……少なくとも小竜姫クラスの霊格）アイツはどうしたの!？」

『アイツとはこの男の事か？』

そう言っつて、突きだしてきたのは……明人

ひょい、と投げられた明人はドサリと音を立てて、美神の前まで転がると……

ぼわんっ!!

「『へ?』」

明人の死体?が突如煙に変わり、その煙の中には二枚の紙切れ……一枚は身代り符の様子。そして、もう一枚……

はずれ、と書かれた紙がローブの男?の顔に張り付いた。

ローブの男?は体をふるふると振るわせながらも……

『……まあ、いい。天龍童子は手に入ったのだ。イーム、ヤーム。よくやった。褒美だ、受け取れ』

冷静さを取り戻しつつ、そう言って、美神、横島、イーム、ヤーム、天龍童子の周りに火角結界と呼ばれる結界を作り出した。

そのまま転移し姿を消す。

「ふう、やっと行ったか」

ローブの男？が姿を消した瞬間、姿を現したのは……明人だった

……実は先ほどの身代りは身代りではなく、明人本人である。煙を出し、身代りの符を見せ、身代りだったと思いきまし、絶で隠れていたのだ。

「あ、あんた。なんで、そこに!？」

「いやあ、さっきの人、強そうだったんで、不意打ちできる様だったらしようかなあ、と思って隠れてたんですよ」

そして火角結界が発動し、ローブの男が姿を消したので、姿を現したのである。

「とりあえず、結界を破りましてっど……」

結界破りの符を使って、火角結界に人が通れる程の空間を空ける。

「まあ、良いわ。今から外に出ても間に合わない!! こっちよ!」

そして美神の案内で緊急用の脱出シューターへと飛びこみ、地下

に繋がっている下水道へと逃げ込んだ6人。

イームとヤームは美神に指示され、こんなこともあるのかと、放置されていたボートの準備を整えていた。

そのボートに乗り込み、敵の裏をかいて逃走するつもりなのだが、ボートが進みだして間もなく。

下等な魔竜である大口の化け物・ビツクイーターが襲いかかってきた。

「ちっ、美神、もっと飛ばせ!! 追いつかれるぞ!!」

「分かってるわよ!! スーパーニトロターボブースターチャージヤーン!!」

「わ~~~~~~~~!! 嫌や〜死にたくない~~~~!!」

急激にスピードを上げるボート、イーム、ヤーム、明人が後方に向かって攻撃し、敵に牽制している。

「美神さん、前!!」

横島の声に美神は前を向くと、出口には鉄格子がしてあった。

「まーかせて! ちゃんとりモコンで開くように細工してあるんだから。あれ?」

カチカチとりモコンを押すが、反応しない。

「でっ、電池が切れてる！？ 横島くん、単三電池とか、持ってない？」

「持ってるわけ無いやないか〜！！」

「あるぞ、ほれ」

明人が新品の単三電池を放って渡す。

「『『『』』』つて、あるんかい！！』『』『』『』」

その場に居る全員からツッコミを受けてご満悦の明人であった

無事、柵を潜り抜け、東京湾へと逃げ込もうとする。

しかし、そのとき、上空から光が襲いかかってきた。

「くっ、符よ！！ 散らせ！！」

ありつたけの符をばらまき、結界を形成させ、その光を完全に散らした。

『人間風情が……私の攻撃を止めるだと……』

「はっ、さっきからこそそと攻撃してきやがって、不意打ちでもしないと、人間に勝てないからじゃないのかい？ 魔族のお嬢ちゃん」

明人の言葉に体を振るわせるローブの男？というかメドーサ

『だが、お嬢ちゃんだって!! そこのガキと一緒にすんじゃないよ!!』

ローブを解いて、本当の姿を見せるメドーサ。なるほど、確かにお嬢ちゃんと呼ばれる年齢ではなさそうである。

むしろ、おばさんと言っても過言ではあるまい。

原作ではかなり、ケバケバしく表現されていたが、実際に見ると熟女としてはかなりの美人である。

「なら、その力、見せてもらおうか？ お嬢ちゃん」

しかし、それでも明人は挑発することをやめなかった。その事に激怒し、明人の居るボートへと迫る。

『貴様あ!!』

明人はボートのへりを蹴ると跳び上がった。

『飛べもしない人間風情が、空中戦をしようってのかい!!? 舐めるんじゃないよ!!』

そう言いながら持っていた二股の槍を、明人に向かって突きだすメドーサ

「ほい」

空中で方向転換をする明人

『なっ！？』

方向転換が出来た理由は明人の足元に発生させられた青白い光の盾。

横島が後に使う霊能……サイキックソーサである。

明人の力は収束に秀でているため、この程度の基本技ならば使えるのだ。

それを足元に展開し、足場として使っている明人。

さらに言えば、明人はこの応用を西遊記の斤斗雲キントウンの術を参考にしていたりする。

しかし西遊記の物語のように、乗って移動することはできず、できたのは足場程度である。一步踏み出すには新たな足場が必要ということだ。

だが、利点も存在する。

飛ぶよりも方向転換が容易であることが、第一に挙げられる。

魔族が飛ぶのには、その膨大な魔力を噴射する必要がある。その為、踏み出すと言う本来、人の形を持った存在が行うことが出来ないのだ。

そして第二の利点……それは足場がある事。

武術において、地に足を付けているのと、付けていないのでは…

…文字通り天と地ほどの差が存在するのだ。

「長々と講釈垂れたが、この間、0.1秒ほど。」

二股の槍を避けられたメドーサの脇腹に明人の肘が突き刺さった。

『がつ！？』

H×Hのメルエム程のオーラ……霊気も無ければ、この一撃はかなり痛い一撃であろう。

「ぶっ」

ここで更にもうひとつ、この足場……というよりも盾には利点が存在する。

挟み込むと言う技術が可能なのだ。

肘打ちから押し込むような双掌打。メドーサの背後には霊気の盾。

メドーサが霊気の盾にぶつかり、その盾が爆発する。

「がつ……あ……」

その衝撃に意識を失い、海へと落下するメドーサ

しかし海面すれすれで、意識を取り戻し、姿勢を取り戻す

『く、はあ、はあ………いつたい、なにが………』

正道邪道を極めたと思っっている奴には、かなり手痛い攻撃であつただろう。

「なにをされたのか、分からないって表情だな」

『くっ……人間が……人間風情があー！』

そして、メドーサの姿がかき消えた。

超加速へと移行したのだろう。

だが、それも……

ガキイイーン！！

『ここからは私が相手です！！ 竜族危険人物、黒便覧はの五番！
！ 全国指名手配中、女蜷又ー！！』

説明ご苦労さま、小竜姫さん

どうやら、原作では下水道の鉄格子を破壊する爆発音を聞いて、こちらに向かつて来ていたようだ。この世界では、明人が介入したことにより、その爆発音も聞こえず、メドーサが姿を現したことで、気づき飛んできたのである。

『ぐっ！！ 貴様は音に聞こえた神剣の使い手、小竜姫！！』

小竜姫と鏢迫り合いになったことで、超加速空間から戻り、互いに互いの名を呼ぶメドーサと小竜姫

『（こいつの相手だけなら、なんの問題もないが……あいつ）貴様、名前はなんてんだい！？』

「神木明人、しがない探偵だよ」

『神木……明人……その名前、覚えたよ！！ 次に会った時、あんなは私が殺す！！』

「殺し合いよりもデートの約束の方が嬉しいんだけどなあ」

『はっ、戯言を……』

そう言つと、メドーサは転移し、姿を消すのであった。

『くっ、待ちなさい！！』

元気満々な小竜姫がメドーサを追おうとするが……実を言つと、こっちは結構限界だったりする。

「くっ……」

足場に展開していた盾が消え、海面へと落ちようとしていた。

『え？ え？ あ、明人さん！？』

いきなり意識を失い落ちていく明人を慌てて拾い上げる小竜姫

その明人の背中を触れた瞬間、ぬるりとした血の感触

『くっ、これは……』

そう、最初に不意打ちで攻撃された箇所である。

靈気を集中させ防御したものの、ダメージを受けていたのだ。

慌てて、埠頭へと連れていき治療を開始する小竜姫なのであった。

あ、美神たち、空気だ……

明人、生きてます（後書き）

いやはや明人、強すぎだね。でも、このくらい出来るよなあって
感じで書かせてもらいました。

ちなみに前回の不意打ちは……平和ボケした結果ということであ
り
容赦ください

しかし、ギャグって難しいなあ

はやくYOKOSIMAだしいなあ（エ

かなり早いけどクリスマス

前回、背中に怪我をして療養中の明人で〜す。

いやはや、最近横流ししてもらった低級霊との戦闘くらいじゃ、平和ボケしちまいますよ。はっはっはっは

はぁ……………しかし、不意打ちとか、ほとんど初めてじゃないだろうか

前世界（H×H）でも、受けた記憶はねえし、前々世界（史上最強の弟子ケンイチ）の時は……………時々あったけど。転移してすぐさま攻撃してくる奴なんて居なかったからなあ。まだまだだねえ、俺も……………

しかし、対処法がなあ……………霊気を集めて受けるくらいしかできない訳ですよ……………

あ、一応、対策も練ってたんですよ？ ほら、机妖怪の愛子に使った身代りの符……………あれでダメージを肩代わりさせようと思ってたんだけど……………背中に張ってあったんだよねえ。霊波砲を背中に受けてダメージの肩代わりとか言う前に燃え尽きたけどねえ、はっはっはっは！！ 意味ねえ！！

それに今までは不意打ちと言ったら気配を読んで対処してたからなあ……………すこし過信しすぎてたみたいだ

しかし転移って良いなあ

転移符って結構、霊気食われるからなあ……でも二丁三枚くらいなら作っておいた方が良いかなあ、やっぱり

転移符は、普通の術者が10人で一晩かけて書き上げる。という設定です。明人の場合は一人で一晩掛かります。

よしっ入院中暇だし、書いとくか!!

三日後……一睡もせずに書きためた結果、出来た転移符は10枚

計算が合わない？ そりゃそうだ。外気吸い取り君、使ったもの

使ったのは一日三本。最終日はきりが良いように四本吸って書き
ました。

ちなみに現在、俺が生成できる量は一日に四本、使わなければ溜
めておくこともできる……

いやはや、チートアイテムだねえ……メドーサ戦じゃ、使わない
ようにしてたけど

断じて忘れてたわけじゃないぞ!! 切り札はいくらあっても良
いから使わなかっただけなんだからな!! 本当だぞ!!

はあ、俺はいつたい誰に言い訳をしているのやら……

いろいろと考えていると、退院の手続きを済ませた真がやってきた。

『明人殿、準備は出来たでござるか？』

「ああ、出来てるよ。さっさと帰ってお前の飯が食いたい。もう病院食はこりこりだ」

『なはははは、照れるでござるな。ではさっさと行くでござるよ！
！今日はハンバーグに挑戦するでござる！！』

「んじゃ、帰りに商店街に寄らないとなあ」

今日も神木事務所は平和です。

いや、終わりじゃないんだ。

まだ、少し続きがある。

明人と真の二人が商店街に向かうと、そこは……クリスマスムードにまつまれた街並みだった。

商店街ではジングルベルの歌が流れ、店先にはツリーが並ぶ。

「ああ、今日はクリスマスか……そういや、ここ何年か祝ってねえな」

H×Hの世界ではもちろんのこと、前々世界のケンイチ世界でも祝った記憶が無い。

前世での記憶も思い出そうとするが……ほとんど覚えもなく

「30年近く、祝った覚えがねえなあ」

ケンイチ世界じゃ、修行修行の日々だったし、H×Hの世界じゃ、たしかG Iで修行してたっけか

「真もいるし、今年はすこしばかり趣向を凝らしますか」

『明人殿？ 先ほどからぶつぶつ言っている所為で人から避けられているじゃないよっ』

「まま、あのおじちゃん。一人で喋ってて怖い〜」

「そつとしておいてあげなさい。永く生きてると人にはいろいろとあるんだから……!」

「誰がおじちゃんだ〜〜!!! お兄さんと呼びなさい!!!」

「「きや〜〜」

通りすがりの親子が悲鳴を上げて逃げていく。

「まあ、なんにせよ、買い物して帰るか」

『そうでござるな! ……そういえば、明人殿。くりすますとはなんでござるか?』

ああ、そういや、こいつ首塚の中に居たから知らんのか

「クリスマス・イブ、12月25日の前の晩にサンタクロースという恰幅のいい赤い服を着た爺さんが、良い子にプレゼントを配る日だ」

『おお! そんな奇特な人物が居るのでござるか!?!』

「今年はお前さんのところに現れるかもしれんな」

『はっはっは、それは無理でござるよ。拙者は侍……血に濡れていゝるでござる故』

「冗談で言ったつもりだったが、真は自分の手を見ながらそう言うて返す。

どつやら、罪を受け入れているらしい。

その表情はどこか、寂しげで……

「それでも、現れるさ」

俺はそう言っていた。

『そうなのでござるか？』

真が首を傾げるのを見て、明人は悪戯を思いついた様に笑った。

「ああ、現れるさ。むしろ、会いに行こう」

明人がそう言うと、向かった先は新らしくなった美神の事務所だった

たしか、サンタクロース本人が、この事務所の結界にぶつかっただけなので、実際に会いに来たのである。

「ちわく、なんか手伝いに来ました」

引越し屋に指示している美神に挨拶し、手伝いを申し出る。

「それじゃ、ここの荷物を二階に運んでね」

危険物と書かれたダンボールの山があった。

どうやら、相当危険なものらしく、普通の引越し業者には任せられない代物らしい。

それをせつせと運びこむ横島の姿があるが……まあ、横島だしね。

「さてと、俺も運ぶとするか。真はおキ又ちゃんに指示もらってダンボールの整理してきてくれ」

『分かったでござるが……サンタクロースはどうするでござるか？』

「それについては後のお楽しみって事で」

まあ、ちゃんと結界も起動しているようだし、大丈夫だろう。

そんなこんなで、夜になるころには片付けも終わり、クリスマスイブと言うことで、パーティを行うことに……

明人は片づけを早めに抜けて、料理の下ごしらえや、クリスマスケーキを作り台所に居た。

本来の目的を忘れ、ケーキのデコレーションにこり出し始めていたころの事である。

ドオオオオン！！ と、馬鹿デカイ音と共に屋敷全体が震える。

本棚やらが倒れるほどの震動に、ケーキが飛び、皿が飛び、下ごしらえの終えた食品の数々が飛んだ。

「！！ はっ！！ ほっ！！ おっと、と、と、と、と、とおおおおお！！！！」

右手にボール（中にはタレを付けたチキン）、その上に大皿（皿の上には後は揚げるだけと言ったフライ）が乗り、足の上にもボール（こちらは切りそろえられた野菜の数々）。左手では寸胴の蓋を抑え、スープがこぼれないように保持

そして……最後のケーキが

頭の上に乗った。

逆さまの状態で………

「……………シャワーでも借りるか」

シャワーを浴び終え戻つてくると、そこには赤ら顔のおっさんが一人、ベットに横になって眠っていた。

「ん、あんたは………サンタ？（やべえ、すっかり目的の事、忘れてた！！ あ、でも真も一緒に着いて行ったみたいだし良いのかな？）

「ん？ まだおつたんかい。おまえさんは連中と一緒に行かなくて良かったんか？」

「（まあ、望むものが手に入るサンタクローズの袋だっけか？ でも、アレって子どもの頃にほしかったものがもらえるんだっただは………てか、原作で知っても、いま知ってるのはおかしいような。でもこのおっちゃん、俺がしってる前提で話しているような、居ないような………）どうでもいっか。で、おっちゃんはこんなところで何やってんの？」

「ん？ ああ、お前さんは聞いてなかったんか……わしゃ、本物のサンタでな。ここの結界にぶつかって、ぎっくり腰になってしもうたんじゃ」

「なるほど、なるほど、それでおキ又ちゃんが、手伝えることはないかと言って来て、それに対しておっちゃんは自分の分も出していいと言った。その言葉に欲を出した横島と美神が追従、ついでに真も面白そうだからと言って、ついて行ったと……」

『その通りや。まるで、見ていたみたいに言いよるのう。坊主』

「そこは突っ込んだじゃ、いけないよ。おっさん」

と言う訳で、状況説明は終了。

「それでおっさん、腰は大丈夫なのか？」

『まあ、一日休んどりゃ、治るやろ』

「そっか。ならいいや。んじゃ、俺は台所に居るから何かあったら人工幽霊通して呼んでくれ」

『おう、すまねえな。ニイちゃん』

「気にすんな。おっさん」

その後、相手がサンタと言う事で、クッキーとミルクを持っていったところ……

「おお、気が効くやないか」

それを食べると雰囲気が一変した。

いままで、酔いどれ親父と言った風貌だったおっさんが、ホッホウホウホウ！とか笑ってそんな感じの……サンタらしいサンタに変わったのである。

クッキーとミルクにはお供え物の様な効果でもあるのだろうか？

てか、おっさんの時よりも絡みずらいわ……

まあ、日が昇ったら治ったけど……今じゃ、酒瓶片手に酔っぱらってるよ……

かなり早いけどクリスマス(後書き)

クッキーとミルクに関しては捏造です

横島からYOKOSIMAへ……

実際にサンタと出会ったクリスマスが終わり……正月は住居スペースで年越しそばやら、おせちやらを食べて終えた。

まあ、病み上がりと言うことで、のんびりしておりました。

いやはや、かなり平和だった。

仕事もちよちよいと片付け、数か月……何事もなく、過ごしているのだが……

「仕事がこねえ」

相も変わらず、探偵としての依頼が無い。

これでは平和ではなく、暇でしかない

『仕事だったら、警察から凶器の特定の依頼が来てるでござるが？』

そっちは一応、裏の仕事だ。

「そっちは終わった。この資料、FAXで送つといてくれ。俺が言ってるのは表の依頼。猫探しとか、浮気調査とかだよ。こないだ近所さんが、オレの事なんて言ったと思う！？」

占いで出た結果をまとめ、書類にしたものを受け取りながら返事をする真

『なんて、言ったでござるか？』

「真ちゃんにばかり、働かせてないで自分でも仕事しなさいよ、だだよー！ 公に出来ねえが、仕事はしとるわー！」

『ろくに働いてないのは本当のことでござろう。ここ二カ月、表の仕事と言えば、ペット探しと、浮気調査でござったし。そのどちらも八卦盤で探し、式を飛ばして終わりでは……働いてないようなものでござる』

……………それもそうだ。

「あゝ、まあ、いつか……パチンコ行ってくるわ」

『行ってらっしゃいでござるよ。拙者は近くの神社に猫の餌をやりに行くでござる』

「おゝ、行って来い行って来い。どうせ、仕事なんてこねえんだから」

この男、ダメ人間と化しつつあった。

数時間後

「勝った。勝った」

「えっと……原作だと、たしか小竜姫から心眼を貰うんだっけかなあ」

明人はマイペースに原作での事を思い出しながら、のんびりと歩きます。

この世界が、原作と同様に進んで行くと……そう考えて……

その考えが裏切られることなど、知らずに……

なんか、深刻そうな言い方を見て見たが、大した意味は無かったりする

明人が人工幽霊一号に許可を貰って、美神の事務所に入って行った。

そして部屋の扉を開くと……小竜姫が横島の額にキスをしている瞬間だった。

おキ又は驚き、美神は半眼になって、×印が顔に浮かび上がる。どうやら、横島に対し、意識はしているようだ。

いやはや、傍から見るとおもしろい。

面白いのだが……横島の反応が原作とは変わっていた。

「……………」

無言で、目を見開き、驚く。更にはまるで自分の状況を確認するかの様に、首を左右に振って辺りを見回す。

「あれ？ 小竜姫さま？ 美神さん？ おキ又ちゃん？ え？ あれ？」

「ちょっと、どうしたのよ？ いつものあなたなら、小竜姫さまって叫んで襲いかかるのに」

小竜姫に襲いかかるのを防ごうと近づいていた美神がそう言った。

まったくもって、その通りなのだが……横島は……

「え？ あれ？ そうですよ……スンマセン。体調が悪いんで、今日は帰ります」

と、そう言っただけで呆然とした表情で、部屋を出ていったのだった。

「ちょっと、小竜姫さま？ うちの横島クンにいったい何をしたの？」

『あ、あら？ おかしいですね』

……その会話を聞いて、俺は事務所を出て、横島の後を追った。

頭を押さえながら歩く横島。

いや、説明は出来る。

横島には符を書くと言う霊的修行を行っていたのだ。

横島自身は修行とは思っていないなくとも、修行を行っていたのである。

その霊力が心眼によって開眼したのかもしれない……

だが、明人はその考えを否定する。

このような霊力の暴走が起こるのか？

その疑問が、明人自身の考えを否定していた。

「横島！！ 霊力を纏え！！ 体に循環させるように！！ 心を落ちつける！！」

たったそれだけの言葉で、噴出していた霊気を身に纏わせ、念の『纏』の状態に変えた

「う……あ………はあ、はあ、はあ………あれ？ 明人……さんっすよね？」

「おお、そうだ。いつたい、お前の中で何が起こってる？ 霊気の量がいきなり上がったが……」

「えっと……俺もよくわかんないんっすけど。たぶん……俺、未来から来たみたいっす」

.....
はい？

横島からYOKOSIMAへ……（後書き）

みんな~~~~~、ついて来てるか~~~~~!!?

扉を開けるとそこは……混沌でした（前書き）

申し訳ございません

かなり遅くなりました

言い訳をすると……PCが天に召されました…

現在、スマートフォンで執筆しております。

新しくPCを買うお金もないので、これからもかなり遅くなると思います
ますが……よろしく願います

扉を開けるとそこは……混沌でした

扉を開くとそこは混沌でした

え？ なんの事だか分からない？

横島の部屋のことだよ

「てか、なんでお前まで驚いてんだ？」

俺のとなりで驚いている横島にそう言った

「なんちゆうか……ここまで汚かったんかなあと思ひまして……」

まあ、男の一人暮らしだしこんなものだと思うが……

「とりあえず、片付けますんでそこらへんにでも座っててください」

そう言つと腕捲りして、掃除を始める横島

窓を開いて万年床となっていたふとんを干し、埃を落とす。

布団があつた場所だけ畳がきれいって言つのはどついつわけだろ
うか……

エロ本やエロビデオは女優順に並べて押し入れにしまつていく手
際はまさに神の「とく」……

というよりも、収納スペースの確保が早く、あつと言つ間に混沌

としていた部屋が清浄な空間に変わっていた。未来でマリリンに師事していたのだろうか？……一部ピンクなオーラを放っているがそれは無視しよう

「えつと、ここら辺に煎餅が……あとお茶、お茶」

俺と自分の分のお茶とお茶請けの煎餅をだして人心地つく横島

「ふう……それでいくつか聞きたい事があるんっすけど……明人さん、貴方は何者っすか」

……いきなりシリアスです

「そりゃどついう意味だ？」

「……単刀直入に言わせてもらおうと、俺の知ってる未来において明人さんは存在しなかったっす」

「その言葉だと、俺はお前がいた世界に俺は居なかったと聞こえるが……あっているか？」

その言葉に頷く横島、明人はため息を一つ吐くと少し考えて返答する

「まず考えられるのは、ここがお前のいた世界とは異なる世界であることだ。お前は未来から来たと言ったが、ここがお前の居た世界に似た世界であると考えた方が可能性は高い。俺がいる理由はそれで説明がつくだろう？」

まあ、実際のところは分からんが……本来、この世界は一本道

の世界な訳だし、それに……

「それにお前はこの世界に来たんだ。ここはお前の過去ではなく未来でしかない」

「過去じゃなくて未来？」

「ああ、憶測でしかないがな……つまり、ここはお前さんの過去ではないと言っこと。んじゃ、次はこっちから質問だ。この世界の横島はどうした？」

「えっと俺は俺のままっすよ？ なんちゅうか未来の経験と知識を受け取っただけで、俺は俺のままっす」

「なら未来から来たとか言っんじやない。紛らわしいだろうが」

「すみません」

「そっちから質問はあるか？ 無いなら他にも色々聞きたいんだが」

「大丈夫っすよ。俺のわかることなら答えます」

その後、いくつか質問をした。

そして、分かったことは……どうやら、この横島は原作とほぼ同じ存在であるということ、そして原作終了から三年が経っていたことがわかった。

「それで、どうやってこの世界に来たんだ？」

「……さあ？」

くっ……思わず、ずっこけてしまった。俺もとうとうこの世界に毒されてきたらしいな

「さあ？ とはなんだ、さあ？ とは！？」

てか文殊で来たんじゃないのか！？

「なははは、多分文殊を使ったんだと思うんですけど、なんか最後の一年間の記憶が曖昧でして」

はあ、まったく……このバカは…

「いま、文殊と言ったが……」

「あ、はい。これっす」

そう言っって手のひらに文殊を出そうとする横島だったが出てこない。

「あれ？」

首を捻って、気合いを込めてみるが出てくる様子はなかった。

「おかしいな……霊力は十分たりてんに……」

どうやら、文殊を作り出せないらしい

まあ、原因はなんとなく解るがな

言っただろうか……別に良いか

「靈力が足りてても、それを通す気脈が細すぎるんじゃないか？」

「おお！ それっすよー！！ あれ？ それじゃ……また老師相手の修行しないってことじゃ？」

まあ、そういうことだろうな

未来のことは知らないことになってるから言わないけど……

「それで、これからどうするんだ？」

「……強くなるうと思います。強くなってルシオラを……俺が好きだっけ言ってくれたあいつを守りたいっす！！」

「へえ、ルシオラをね。良いんじゃないか？」

未来で起こることはだいたい聞いてある

ああ、そつだ。肝心なことを聞き忘れた

「横島、お前は美神のことをどう思ってるんだ？」

その言葉に横島の表情が曇った

「はは、嫌いじゃないんっすけどね」

その言葉はすこし意外だった。

「なのがあったのか？」

「……………」

「どうやら、何かあったらしい。」

「ふむ、言いたくないなら聞かねえよ。いつそのこと、うちの事務所に所属するか？ 政府にや結構貸しがあるから、GS免許さえ取ればすぐに営業できる」

まあ、貸しって言っても脅すだけだけだな

一応、貸しもあるっちゃ、あるが……………そこまで強力なもんじゃない

横島は明人の言葉にすこし目をつむると、答えを口にした

「……………そうっすね。お願いします」

……………ホント、美神の奴いったい何をしたんだろうっか

自分で提案しておきながら、了承を得たことに戸惑う明人

「本当に良いんだな」

「はい、お願いします」

今度は即答だった。明人はため息を吐くと話題を変える。

美神がなにをしたのか知りたかったが……聞かないって言っちゃ
ったしなあ

「んじゃ、時給だけど……いくらほしい？」

「ん〜、千五百円くらいで……って俺に決めさせるんですか!？」

おお、乗り突っ込み……って千五百円かよ!？ ポケか!？ い
や、もしかして美神の奴、正社員でもその給料でやらせてたんじゃ
ないだろうな……ありそうで怖い

「本当に千五百円で良いのか？」

ちなみに、真には家事手伝いと言うことで二千円だったりする

「え？ 高すぎますか？ じゃ、九百、いや、八百円で」

……ダメだこいつ、価値観が大幅にずれてやがる!!

「いや、千五百円で良いよ」

こいつなら時給一万円でも安いんだがなあ

差額は別に通帳を作っていていれておこう。確かお袋さんが来るはず
だし、その時渡しときゃ良いか

「ホントっすか!？ よろしくお願いします!！」

ううむ、不憫だ

ゴーストスイーパー資格取得試験

平成5年度

ゴーストスイーパー資格取得試験

一次試験会場

その入り口で美神はイライラしながら待っていた。

「遅いわねえ……あの馬鹿何してるのかしら」

そこにタクシーが一台とまり、扉が開かれ出てきた横島

「あんだねえ!!!」

美神はそこまで言って言い淀む……

いつになく真剣な表情の横島がそこに立っていたのだ。

「おお、美神か。後で少し話があるんだ。時間を取ってもらえるか？」

そう言ったのは横島の後から降りてきた明人

「……それは良いけど。あんだ、横島クンに何したの!？」

おお、怖……まあ、気になる奴がいきなりが、こんなに変わったら……まあ、そうなるか……

「ん、すこしばかり修行に付き合っただけだよ」

昨日、話し合いが終わった後にどれだけ動けるか確認したから、嘘ではない。

結果？ 時間十分三本勝負、なんでもありで一勝一敗、一引き分けだったり……

なんちゅうか、最初は横島のトリッキーな動きに翻弄されつつも、小細工なしの一本勝負だったため、こちらの一勝

次の時は時間ぎりぎりまで逃げ回られて引き分け……

そして最後の勝負で前回、逃げ回った時に作ったと思わしきトラップに掛かり一敗と……

これでもトラップの判別は得意な方なんだけど……やっぱり慢心はいかんねえ

「あ、そうだ。美神、横島はうちの事務所の名義で登録するから」

「はあ！？ 何言ってるのよ！！ 無理に決まってるでしょ！？」

「え、でも一応、うちでも雇用契約してあるんだけど。ほれ」

そう言っって書類を見せる。

「これじゃ、二重契約じゃない！！ てか、あんたのところの事務所は正式なGSは居ないでしょう！！ 正式なGSが居なきゃ、こ

の試験だつて受けれないわよ!!」

「ちゃんとGS免許を持った奴から許可書類は書いて頂いていますのでご安心を」

ま、売れない三流GSの署名だけどな

「だからつて……横島くんみたいな無能をなんだつて引き抜くのよ!?!」

「無能ねえ、かなり優秀だと思うが……まあ、それは良いや。どっちにしろ、そつちはアルバイト契約、しかも横島は今期の雇用契約の書類にサインをした記憶は無いそうだし……本人の意思ですぐにでもやめられるはずだ。それにこちらは社員契約を交わして置いた。時給は一万五千円、まあ、待機中は五千円まで下がるがな」

「え? そんなももらえるんですか!?!」

そこまで話している横島が突つ込みを入れてくる。

「ああ、お前の能力ならそんなところだろ。まあ、高校生にそんな大金渡すわけにはいかないから別途で通帳は作っておいてくれ」

「……(中身は二十歳超えてるんだけどなあ)うっす了解です」

「ま、そんなわけで美神、横島は引き抜かせてもらったよ」

「……横島くん」

明人に言い負かされ、美神は横島の説得に掛かる。

「これでEミの時と言い二度目……あんたの戻る場所は無いわよ？」
たぶん、美神の奴……横島が泣いて謝ると思ってるんだろ？なあ
……というか原作の横島だったら泣いて謝ってるんだろ？けど……
「すみません、美神さん……」

しかし、横島はそう言った。泣きそうになりながらも、辛そうにしながらも……美神に目を真正面から見詰めながら、そう言った

その言葉に美神が驚き、しばし呆然とするも……数瞬後には鼻で笑いながらそっぽ向いた

「ふんっ、勝手にすれば！！ あと、神木！！ あんたとの契約も打ち切るからね！！」

「ああ、助かったよ。おかげで伝手もいろいろと作れた」

「ふんっ……」

『え？ え？ み美神さん！？ 良いんですか！？ 横島さん行っちゃいますよ！？』

「ほっときなさい！！ あんな奴居なくなっただ方が清々するんだから……！！」

おキ又が美神を説得しようとするが美神はそっぽを向いたまま動かない。

「いままで、お世話になりました」

横島はそう言って美神にお辞儀をして、試験会会場へと向かった。

明人は明人で……苦笑いを浮かべつつも歩き出す。

美神に対し、悪いと思いつつも……それを表に出さず歩いて行った

そして……試験は始まる。

試験と言っても一般的によくあるペーパー試験ではなく、霊力測定からなる。

その霊力測定で上位128名まで絞られるのである。

『では、はじめて』

マイクを通したその声に、気合いをこめて一気に霊力放出する何十人も受験者。

「「「「「はあああああつ」「」「」「」

その中で二人、横島と明人だけが霊波を発さずに様子を見ていた。

この一番、デカイ靈波が美神か……これと同等であれば、まず合格は揺るがないだろう……

と言うのが明人

えっと……前はピートやタイガーの奴も合格してるんだよな。じゃ、目立たないようにピートと美神の間位で、合わせとくか……

てな事を考える横島

「「……」」

一瞬で高まる明人と横島の靈波……二人はぴったりと決めていた靈力量まで力を高め止めて見せた。

気合も何もなしに、である。それがどれほど異様であったかなど、気にすることもなく

その隣にたピート、タイガーは目を見張り……美神さえもその異様に横島を見つめ齒がみする。

そしてしばらく経ち、合格メンバーを発表される。明人、横島は当然の如く合格を言い渡された、他の原作メンバーも同様の様子

「んじゃ、午前中の試験も終了したし……飯にでもするか」

「そつすね。近くに美味しいラーメン屋があるんすけど、どうつすか？」

「この近くって言うと……あそこか」

「うつす、あそこっす!!」

「では、行くでしょう!!」

何故、この二人のテンションがうつすら上がっているのかと言
と……

「急ぐぞ、横島あ!! もうすぐ昼時だ!! 席が埋まってしまっ
ぞあ!!」

なんとって……

「うつす!! 絶対にテーブル席を確保してみます!!」

そこには素敵看板娘（無敵看板娘ではありません）が居るのだけ
ら!!……

「ぬあっはっはっは!!」

奇妙な笑い声を上げて走り抜ける二人なのであった……

「よ、横島さん？ その人、誰ですか？」

ピートの声がむなしく響く。

ん？ タイガー誰それ？

ゴーストスイーパー資格取得試験（後書き）

どうにも、美神やおキヌの正確が掴めません……

そしてギャグが書けん！！

GSはギャグがなければGSじゃないよなあ……と思いつつも書けない……

どうやったらギャグは書けるんでしょうか？

誰か教えてください！！

第一回戦、はっじまるよ

二次試験開始

しかし、面白い組み合わせになったものだ

まず、横島の対戦相手が蛮玄人……原作で第二回戦に美神と戦う相手なのだ。

そして、俺の相手は……誰だろうね？ 知らない人だ。ただ、二回戦で陰念と戦うことになった

つまり、タイガーの位置

そして、そのタイガーなんだが……

原作の横島の位置になっていたのだ！！

これは、タイガー合格フラグか？

……とか思った人には悲しいお知らせ

「タイガー……一回戦で敗退……」

あれか……あいつは合格できない運命だとも言うのだろうか？

そんな馬鹿げたことを考えていると、後ろから声がかかった

「タイガーの奴、負けちまったんすか？」

横島だ

「ああ、そのようだ。お前の知っている未来だとどうだったんだ？」

「一応、二回戦までは行ってたんすけどねえ……そう言えばカオスのじいさん、銃刀法違反しなかったんっすか？」

「ああ、そのようだ。お前の知っている未来だとしてたようだが、どうやら俺やお前が居ることでの世界も変わっているんだろっな」

二人で話していると次の試合アナウンスが流れる

どうやら時間らしい

「んじゃ、十分手加減しろよ。相手が油断するくらいにはな」

「わかってますよ。明人さんこそ下手な加減しないでくださいね」

「わかってるぞ」

さて……行くとしますか

そして運命の第一回戦が始まった。

横島は舞台へ上がると拳と手のひらをあわせてお辞儀する。

それを見た蛮玄人は不適に笑い前口上を述べるが横島は聞いちゃいない

蛮玄人が十パーセントの力で相手をしてやると言い、拳と振り上げて横島に向かって突き進む

対し横島も拳を振り上げて蛮玄人に突き進んだ

「「うおおおおおおお！！」」

両者の雄叫びが会場に響きわたり、会場に居た人間がその声に振り返っていた

そして二人が交錯しようとした瞬間……

横島が足を滑らせてこける。

上体が下がり地面に顔面を強打した。

それを見て会場は大爆笑。シリアスだった雰囲気はどこへやら……

しかし、転んでもただでは起きないと言っかなんちゅうか……

横島の足裏が勢い余って蛮玄人の顔面にヒットした

鼻血を吹き出し倒れる蛮玄人

横島は強かに打ち付けた顔を押さえつつ

「いちいち」

等と言いながら立ち上がった

「あれ？」

蛮玄人を見て首をかしげる横島、その蛮玄人に審判が歩み寄ると
気絶しているのを確認し、横島の勝利を告げた

「なっはっはっは、なんか知らんけど勝つてもうた。儲け儲け」

どこからか扇子を取り出してはしゃぐ横島に悪のりする観客。

良いぞ、まぐれ小僧！！ だとか

おひねりくれちやる、とか言いながら小銭を投げる客

まあ、中には偶然など二度も続かん、等と言って呆れる観客も居
たが、そのほとんどが横島のノリに巻き込まれていた。

そんな中、明人の試合が始まっていた

唯野 喪部 （ただの もぶ）さんが相手である

黒いローブを来ていて、その手には洋書とデッサンの練習用に使
われるような人形を持っていた

「フフフフフ」

喪部は不適に笑いながら、人形を放り投げた。

人形が地面に落ち、その地面に妙な紋様が浮かび上がった

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム……我が名は唯野喪部……いにしえよりの契約に従い、我が敵を討ち滅ぼせ。いでよ。先を見通す者よ」

地面に浮かび上がった紋様が光だし、強大な靈気が結界内を吹き荒れる。

カタカタカタカタと骨と骨を打ち鳴らすような音が響いていく
紋様の中心にいた人形が自ら立ち上がり、そして浮かび上がる。

その人形に靈気が吸い込まれていった

人形の間接部分が外れ、それらのパーツ一つ一つが靈気を使って骨を、肉を産み出していく

顔には捻れた角。背中にはコウモリにも似た翼、そして先端が矢印のような黒い尻尾が生えていく。

いわゆる魔族と呼ばれる者が現れた

「くふ、くフフフフ…さあ、始めようじゃないか!! さあ、殺してしまえ!! 先を見通す者よ!! くフフ、クハハ、あっはっはっはっはは!!」

自信に満ちた表情で悪魔に命令を下す唯野喪部……

悪魔もまた、その命令に答え

『……………帰る！！　こんな化け物に勝てる訳無いじゃないか！！』

ドロンと煙をたてて紋様の中に姿を消した……………あれ？

「ちょっと待て！！　契約と違うじゃないか！！　僕に力を与えてくれるんじゃないのか！？」

ポツンと残った人形をガクガクと揺すって文句を言う唯野喪部

『無理だよ～～！！　先が見えちゃったもん！！　下手な事したら、全身の骨を砕かれて内蔵と言う内蔵をひっぱりだされたまま、死ねないように霊力を血脈から流し込まれて磔にされて、それなのに霊力を奪って封印しようとするもん！！　悪魔だってそんなことするもんか！！』

その悪魔（人形）が発した言葉に観客や他の選手やらが若干引いていた。

若干なのはどんな状況なのか頭が追いついていないのだろう。

「失礼な、そんな事する訳ないだろうが…てか、できもしね……………」

いやあれやって、こうして、あれ使えば……………」

「できないこともないか……………」

その言葉に悪魔と唯野喪部が抱き合って悲鳴をあげた

『「ヒイイイイイイ!!」』

そして、唯野喪部は審判に降参を宣言するのであった。

こうして明人は、拳を振るうこともなく第一回戦を突破するのであった。

「でも、なんの理由もなしにそんな事する気はないんだよなあ」

あの悪魔はいったい何をしようとしていたのか……それはそれとはとてもなく悪いことなだろう。

そして、試合も終わり、作戦会議へ……

ぶつちやけ横島と明人は、メドーサが介入している場所は白龍寺だと知っているが……明人の対戦相手を見て、一応調べてみることにしたのだ。

『あー！ 横島さん！！』

俺と横島が美神の事務所に入っていくとおキヌが飛んでやってきた。しかし殺気にも近い怒気を美神が放つ

「いったい、なんの用？ うちを辞めてった奴に構ってられるほど暇じゃないんだけど？」

うーん、かなり刺々しい。

まあ、悪いとは思ってるんだよ？

「いや、なに、こちらで掴んだ情報を伝えておこうと思ってな」

まあ、出場者に鳥を模した式を送っただけでたいした労力ではなかったが

その式が破壊された場所が一カ所だけ存在した。

それが白龍寺だったことを伝える。

「信じるか信じないかは任せるよ」

因みに唯野喪部は本当にただのモブキャラだったらしく。メドーサとの接点は確認できなかった。あの悪魔との契約は、代々受け継ぐものらしい。覗き見してたら父親に怒られてました

「……フン、あなたの仕事は早くて正確だったのは知ってるからね。信用はしてあげるわよ。それと横島くん、明日の相手には気を付けなさいね」

おお、美神がデレた。横島が離れたことで自分の恋心を自覚したのだろうか？

んな、訳ないか……美神だし、ツンデレのデレもひっぱたきが蹴りになるような女だ

「ありがとうございます……美神さん、俺、負けませんから」

しかし、こいつもこいつで何があっただか……あの美神を相手に勝利宣言かい。まあ、試合することでアドバンテージは十分にあるわけだけど……

「ふん、言ってなさい。勝つのは私よ」

って、ばらしとるし……まあ。知らんのは協会の連中位なもんだから別にいいけどさ

「んじゃ、用件もすんだし帰るとするか」

「うっす」

横島と明人が背を向けて帰ろうとすると、少女が扉との間に割って入ってきた

『よ……横島さん！！　なんで、なんで辞めちゃうんですか！？』

目尻に涙を浮かばせて、そう叫ぶ巫女服姿の少女

「ごめん、おキヌちゃん。俺はこうでもしないと先に進めないんだ。

美神さんやおキ又ちゃんがいると甘えちゃう自分が嫌なんだ。だから……ごめんね、おキ又ちゃん」

横島は苦笑を浮かばせながらそんな言葉を返す

『横島さん……』

横島は扉を開けて、その場を立ち去った。

明人は横島の言葉にため息を吐くと、この事務所の主である美神に挨拶をして立ち去ろうとする

「それじゃ、すみませんが俺もこれで「待ちなさい」「」

しかし他ならぬその主によって引き留められてしまった。

「あんだ。横島クンに何をしたの？」

その言葉に二度目のため息を吐きだしながら、頭をかく明人

「俺は何もしてねえよ。あいつは……ただ大人になろうと足掻いてるだけさ。そんな男をじつと見守ってやるのが大人の女だと思っただけ？」

「んじゃ、俺も失礼しますよ」

そう言って立ち去る明人なのであった。さすがは今年で三十代を終える男である

「ふんっだ。なにが大人の女よ……まだ二十歳にもならないようなガキのくせして……」

因みに肉体の年齢は十八歳……どうやら美神はそっちにしか目が
いかないらしい。

霊能者としてそれで良いんだろうか？

両者激突(前書き)

……スマホで書くのってやっぱりキツイです……

パソコンよ!! 早く来い!!

両者激突

第二回戦……

あの男と陰念の対決……なんだけど

……勝てる気がしないねえ

しかし、あの男はいつたい何者なんだか……

私の不意打ちを無傷……しかもその後は人間の分際で空中戦

私は自分が最強なんて思っちゃいけないがこれでも……人間なんかに負けるとは思っていなかった

ちっ、嫌になるよ。またこの思考になる。まったく……それもこれもアイツと対峙してからだ。

人間を侮っちゃいけないなんてねえ……

はあ、本当にアイツは何者だってんだい

とある女性の思考

どっかの誰かさんがそんなことを考えているとは知らず、明人は呼ばれるがままに舞台へと上がった。

対戦相手は陰念である

「けっ、可哀想な奴だぜ。二回戦でこのオレと戦うことになるんだからなあ!!」

明人を指差して格好をつける陰念は、そのまま言葉を続けていく

「しかもだ。この戦いからフルパワーを出して良いなんてお墨付きまで貰ったんだ!! お前にもうほんの一握りの勝ち目もありやしねえぜ!!」

そう言つて拳を握り気合いと共に靈力を放出させた。

「はああああああああ!!」

靈気が体を覆い、化け物を形作っていく。

「くっくっくっく、これで貴様に勝ち目は……」

そこまで言つて、やっと気づく。

「くう……」

明人は寝ていたのだ鼻ちようちんを出して!! と言つた前口上が長いのだ!!

「な、な、なめ腐りやがってええええ!!」

陰念が拳を振り上げて襲いかかると、鼻ちようちんが割れ、明人が目を冷ますのは同時だった。

「はっ、いかんいかん……寝てた」

そんなことを喋っている間に陰念の拳が目前に迫る。

その拳を反射的に掌で受け、掌をかえすことで反らす。

一步踏み込み、拳の外側へ。足を入れ背中を押した。

「ぐおおおお!!」

勢いよくこかされた陰念は舞台の上を転がっていく。

その動作に呆れ、笑う観客。そう、観客には明人の今の動作が理解できていなかったのである。

「お前さんに魔装術は極められんよ」

「なんだと!? い、今は勢い余ってこけただけだ!! 次はテメエの顔面に!!」

「第一に霊力と魔力の釣り合いがとれていない事が挙げられる。それはお前さんの精神の落ち着きのなさから来ている」

陰念の言葉を無視して言葉を続ける明人。その言葉を聞きながら

そう言って明人は、初めて自ら攻撃を繰り出した

霊光弾之散。幽々白書の幻海とその弟子が使う技である。

しかし弟子の使うそれ（ショットガン）と違い、幾つもの弾を打ち出すわけではなく。明人は波を打ち出す。

それによって、明人の攻撃は幾つかの点による攻撃ではなく。面による攻撃へとなっている。

言うなれば、霊光弾ではなく、霊光波と言ったほうが正しいだろう。

「な……馬鹿な……オレの魔装術が……」

明人の霊光波によって、魔装術だけを綺麗に消された陰念

「心技体……その内一つでも足りなければ魔装術は極められん」

「くっ……それでもオレは……」

「己の未熟さを知り、過去を振り返れ、そして進めば良い」

「……う、うう」

陰念が涙を浮かばせた。そして地面に手をついて土下座をする。

「オレを弟子にしてください!!」

「やだ」

即答……

「うああああん!!」

陰念は明人の言葉に感動し、涙ながらに去って行くのであった。

……走り去って行くのであった。

さて、雑魚との戦闘も終わったことだし、メインイベントでも見に行くか!!

あ、どもども。明人でーす。

え？ さっきなんで陰念の弟子入りを断ったのか？

ぶっちゃけメンド…じゃなくて、男は嫌……でもなくて

あれだ

一度断ってどれ位奴が食い下がるのか見ようと思ったのさ!!

断じて、男が嫌だったり、面倒くさいなんて理由じゃないんだ。

だから、そんな白い目で見ないでくれ!! 観客席の方々!!

主におキヌちゃんとか!!

横島を引き抜いたせいでおキ又ちゃんが黒いです……しくしく

「横島クン！！ 覚悟は良いわね？」

「うっす」

明人が内心を表情にも出さずに、一人コントで遊んでいると、横島とミカ・レイの試合が始まっていた。

ミカ・レイは怒りを顕にしつつ、手に持った扇子を広げた。

対する横島は手に全身の霊力を集め霊気の楯、サイキックソーサを展開させた。

それを見て、美神が顔をしかめる。

「それが、アイツに教わった技？ なんの覚悟もなしにそんなものに手を出しているとケガじゃすまないわよ！！」

美神はそう言って扇子に霊気を纏わせて振るう。

「その言葉……もっと前に聞かせてほしかったっすよ」

横島は扇子に反応し、胴体と扇子の間にサイキックソーサを割り込ませた。

しかし、勢いは止めることができず、体がくの字に曲がる。

『一撃です！！ これは決まったかああ！？』

『まあ、坊主は一回戦もまぐれで突破したアル。まぐれは二度も続かんアルよ』

『おっと、どう言うことだあ！？ ミカ・レイ選手が膝をついています！！』

『な！？ 坊主が立ち上がったアルよ！？』

『スローで確認して見ます。こ、これは頭突き！？ 頭突きです！

！ 横島選手の額がミカ・レイ選手の脳天を打ち付けています！！』

『脳天は七つあるチャクラのひとつがある場所アル！！ おそらくあのねーちゃんが扇子に靈気を纏わせていたせいで防御が薄くなっていたからアルね。まぐれもここまで続くところしいアルよ』

解説がそんなことを言うなか、ミカ・レイは必死に立ち上がろうとしていた。

なんで、この私が膝をつかなきゃならないのよ！？ 相手はあの横島クンなのよ！？

そんなミカ・レイのもとに横島が歩み寄ってくる。

くっ……私が横島クンに……なんで膝をつけられてるのよ？ なんで……どうやってつけられたの？ 横島クンは靈気を一点に集めてた筈じゃ……

「明人さんに習ってるのは武術っす。靈気のコントロールはこいつに習いました」

ミカ・レイが顔を上げると、横島の額のバンダナに目が開いているのを見た。

小竜姫さまが与えた竜気？

「オレは大丈夫っすから、だから……今は、寝ててください」

横島は泣きそうになりながら、ミカ・レイの首筋に霊気を流し込んだ。

意識を無くしていく中、ミカ・レイは……美神は心の中で、泣きそうな顔をしている少年の名前を呼ぶ

横島…ク……ン………

横島はミカ・レイの体を抱き上げ、舞台を降りていった。

第三回戦……開始！！（前書き）

おっひさしぶりですー！

眠くてテンションがうつすらと高い、発想屋ですー！

まあ、うざったい、挨拶はこのへんにして……本編をどうぞー！

あー！！ 感想くださいー！

第三回戦……開始！！

第二回戦が終わり、GS資格取得者が決定した。

神木明人、横島忠夫の二名に加え、ピエトロ・ド・ブラドー、ドクター・カオス、伊達雪之丞、鎌田勘九郎と言った面々が勝利していく中。

早々に二回戦を終えた明人と横島は救護室に居た。

「美神の様子はどうか？」

美神をベッドへ運んだ横島に明人は尋ねた。

「心配要りませんよ。二時間もすれば目を覚まします」

「ふむ、そんなところか……」

明人は美神の様子を確認すると同意する。そして気になっていた事に対して質問を浴びせた。

「横島……お前と美神の間で何があった？」

「……聞かないんじゃないですか？」

横島の表情は無表情……まるで感情を何処かに置いて来てしまったかの様だ。

だが、しかし……明人の目には横島の感情が揺れていることに気づいていた。

「感情を隠したいのなら、霊力の方にも気を配った方が良いでしょう」

乱れている明人の霊気を指摘した明人に対し、横島は下を向いた。

「……そうみたいですね」

横島は視線を美神に移し、頬に引っかけかかっていた髪の毛を整えている。

それと同時に自身に巡らせている霊気の乱れを抑える。

「はぁ……オレも修行不足ですね……」

そして、無言……二人の間に沈黙が続く。

「……………オレ……………美神さんと結婚してたんです」

ぽつりと横島は呟いた。

「一緒に暮らして……」

愛おしそうに……横島は意識を失っている美神の頬に触れる。

「幸せでした……」

横島の目じりに涙が浮かぶ。

「でも……駄目だったんすよ」

涙がこぼれ頬を伝う。

「オレは……なんにも、守れないんっス」

涙がボロボロとこぼれて行く。

「みんな、死んで……みんな、オレを守ろうとして……」

こぼれおちた涙が美神の頬へと落ちて、流れる。

「オレ……は……失うくらいなら、手に入れたくない」

それが、横島が美神を好きでも嫌いでもないと言った理由だった。

もう、失いたくないと言う理由、それが横島に孤独という道を選ばせていたのである。

「なるほど……ね……」

明人は横島から聞いた情報を整理していた

横島は……アシユタロスとの戦いによって、ルシオラを失った。

それから、美神と結婚し……そして何者かに命を狙われることとなる。美神はその戦いで命を落とす。

いや……みんなと言っていた事から、おキ又や小竜姫なんか死んだ可能性が高い……下手すると知り合い全てを殺されたなんていう可能性だって否定できない

その原因はなんだろうか？

文殊か？

だが、文殊だからと言って命を狙われるのだろうか？

「まあ、いい。今後の方針は決まった。もうそろそろ三回戦だし……横島、お前は顔を洗ってこい」

ボロボロと涙をこぼしていた横島はひどい顔になっていた。それを気にもせず苦笑いを浮かべる

「はは、そんなにひどいっすか？」

頭をかきながら浮かべている表情は普段通りの顔……

まるで仮面でも被るかのよう……表情は変わっていた。

「おう、さっさと行って来い。お前にゃシリアスなんぞ似合わん」
「うわっ、ひっでーっすよ。明人さーん」

そして……三回戦の幕が開く。

戦いは徐々に……激しく、熱く。

『第15話』第三回戦……開始!!』

ガトリングガンの音が結界内部で響き渡る。

迫りくる弾丸を化頸で逸らし、靈気の消費を最小限に抑える明人

「ぬう！？　せつかく内臓ガトリングガンの弾を破魔札弾に改造したと言うのに……弾丸を逸らすとは……マリア！！　捕まえるんじゃない……！」

「イエス・ドクター・カオス」

黒いマントのじじい……ドクターカオスの命令に従って動き出すマリア

「って、おい！！　銃刀法違反じゃないのか！？　今の！？」

「はぁーっはっはっはっは！！　今のは破魔札弾！！　しかもマリアの銃は火薬ではなく空気圧による空気砲じゃ。つまり今のはエア―ガトリングガン！！　銃刀法とやらにはひっかかりゃらんわい！！」

なるほど……

「まあ、どうでも良いけどな」

第一回戦では、タイガーの精神感応は機械人形であるマリアに対し意味を成さず、しかもタイガーお得意の力技でマリアに勝てるわけもなく、勝利。第二回戦の九能市氷雅の霊刀ヒトキリマルに対してはマリアのオカルトを用いた特殊合金製の体でしのぎ、カオスの霊波砲で終わらせていた。

「マリアと離れていて良いのかな？」

明人が走り出し、ドクターカオスへと突っ込んで行く。

「ふははは！！ 飛んで火に入る夏の虫とはこの事じゃわい！！ 食らうが良い！！」

ドクターカオスが変質者の様にマントの前を広げる。

それに対し明人は懐から符を一枚取り出す。

「霊波砲！！」

「符よ！！ 吸いこめ！！」

ドクターカオスは胸に法円を描くことで霊力を増幅し、効果を変えている。

そうして向かってきた霊波砲を明人は吸魔護符と呼ばれる物で吸い込ませた。

「なにい！？」

カオスが驚きの声を上げる。

なぜなら吸魔護符とは、文字通り。魔を吸い込む護符である。しかしこの護符は、靈的物質であればどんな物でも吸い込むことができるが、その反面、弱い靈力のものしか封じる事が出来ないのである。

その為、靈能者は相手がある程度弱らせた後で封印するのである。

しかし……この護符はただの護符ではなく、明人特製の護符であった。

下級の神魔であれば、破れない限り出ることには難しいほどの高性能を誇っているのだ。

「これで、終わり」

その護符をカオスの胸に押し付け破く。

破かれた護符からカオスの靈波が噴出し、カオスを結界へと叩きつけ、試合は終了した。

そして次は……ピートVS雪之丞の試合である。

ピート敗北

「ちよっ!?! 原作じゃボクの見せ場なんですよ!?! 少しくらい描写があっても良いんじゃない?」

はいはい、わかりましたよ〜

……………どうやって、負けたんだっけ？

「原作通り、鎌田勘九郎に横から手出しされて負けたんでしょーが
！！」

だってさ

「ぬあああああああ！！　しまったああああ！！　せつかくの
見せ場がああ！！！」

以上、第三回戦、第二試合でした。

「ん〜」

時間を少しだけ遡り、ピートが苦戦している中……………横島は腕を組んで悩んでいた。

『あ、あの〜、横島さん？　いったい何を悩んでるんですか？』

「へ？　ああ、おキヌちゃん。なんでもないよ。心配してくれてありがと」

横島はそう言うてにこつと笑い、おキ又の頭をなでる。

その笑顔となでなでによって、おキ又の顔が朱に染まった。

『あ、あ、あのー！！ よ、横島さん！？ わたしー！ 横島さんが絶対勝つと思ってますー！ だ、だから……頑張ってくださいー！』

「あ、ああ……絶対勝つよ、おキ又ちゃん（どうやって、勝とうか悩んでただけだなあ……もう、いつその事速攻で終わらせようか……）」

「頑張ってくださいー！ー！」

おキ又は顔を真っ赤にして去って行った。

「はあ……どうやって勝とう……」

横島は……そんな事を口走りながら悩んでいた。

『第三回戦、第三試合の選手はコートへ向かってください。繰り返します……』

「おっと、ピートの試合、終わったのか……あ、あのオカマの妨害、止めるの忘れてた」

どうやら、試合内容までは覚えてなかったらしい……まあ、二年

前の事だしねえ

そして、横島の戦いが始まるのだが……

その相手がいささか異様な相手だった。

「はて？ 美神の相手は、オカマを除けばほとんど雑魚だったはずだが……やはり、変わったのか？」

観戦していた明人がぼつりと呟く。

原作では、この時の美神の試合当では瓶底眼鏡でそろばんで計算してなんちゃらと言った雑魚である。

しかし、今回の対戦相手は違った。

坊主の様な法衣を身にまとい。手には錫杖。笠を頭に深くかぶっているために顔の上半分が判別できない。だが顔の下半分からは長いひげが伸びていることからじじいであることは判断出来た。

坊主は試合が始まると同時に錫杖で地面を叩く。

錫杖独特の綺麗な音が響きわたる

「グオツ!？」

瞬間、横島の体が後方へと飛んでいった。錫杖の音に魔力を乗せ

衝撃波を放ったのである。

『ほい』

坊主がその言葉を紡いで錫杖を振るう。

霊気がまるで月のように形を作り、横島を襲った。

「くっ、はああああ！……！」

横島は咄嗟にハンスオブグロリーを作り出し、それを切り裂く。

「はあ、はあ……何もんだよ……あなた……！」

ガラスが砕けるような音を響かせながら、砕けちる霊気で出来た月

『ほっほっほっほ……なあに、ただの僧侶じゃよ』

坊主はそう言って笑い、横島の目前に一瞬で移動する。

そして錫杖で突きの連打。

横島はハンスオブグロリーの刃をしまい、それを両手に展開。

錫杖の連続突きを受け止め、錫杖を引いた瞬間に反撃に出る。

アップパーの様に掌打を放つ。

坊主は一步下がる事でそれを避けるが……

「伸びろ……！ ハンスオブグロリー……！」

もう片方の腕が後ろへ下がった坊主に向かって伸びて行った。

『ぬお！？』

驚いた様に錫杖で受け止める坊主、しかし横島の攻撃は終わっていないなかった。

錫杖を掴み伸ばした手を戻す勢いを利用しながら、振り上げていたハンズオブグロリーを刃を出しながら振り下ろした。

『なかなか、やるもんじゃわい』

錫杖を回転させて、掴んでいた手を離させ、そのまま錫杖の石突きで横島のハンズオブグロリーを受け止めた。

『ほい』

坊主は錫杖を押し出すようにして横島を突き飛ばした。

「くっ……」

軽い突き飛ばしに見える程度のそれ……しかし、横島の体は10m近い距離を滑った後で止まった。

「……ふう……ホント、何者だよ」

始まってからこの間、わずか15秒……

観客は目が追いつかず、かつての横島を知る者たちは顎が外れん

ばかりに驚いている。

『先も言つたじやろ。ただの坊主じやよ』

次回へ続く……

神様からの伝言（前書き）

坊主の正体……感想ではありえないって言われちゃったけど、その人です。

発想が貧困でごめんなさい（涙

神様からの伝言

『先も言つたじやろ。ただの坊主じや』

坊主の言葉を聞きながら横島は、ハンズオブグローリーの刃をし
まう。

そして無言……

坊主の言葉に横島は何を思つのか……

しまった~~~~~!!!! つい、本気でやってもうた!!!

結構、余裕そうである。

くう!! 最初の霊波の攻撃で、無意識に動いてたし……はあ、
どないしよ……

メドーサに油断させとく作戦……完全におじゃんやないか!!!

はあ……しかし、このじいさん、なにもんなんやろ。メドーサの
仲間うちゆうわけでもなさそうやし……

……なんかどっかで感じた気配なんやけどなあ

『ほれ、どうした。攻めてこんのか?』

錫杖を構え、先端をくるくるとまわして挑発する坊主

「はあ……実力、ばれちつたし……本気で勝ちに行くか」

横島がそう言うと、額に付けられているバンダナに目が開いた。

『……………な、なななな!!』

「ん? 心眼?」

目から聞こえてきた声が尋常なものではなかったため、横島は見えないがバンダナへと目を向けた。

『何故、あのお方がここに居るのだ!? 横島あああ!!』

聞こえてきたのはそんな言葉

「お、知ってるのか? 何者なんだ? あのじじい」

『じじいとは失礼な!! あ、あの方をどなたと心得る!!』

「ま、まさか!! 水戸黄門か!？」

『違うわあああつ!!』

「今のノリなら、水戸黄門しか居ないやないか」

『それもそうだが……ってそうじゃない！！ あの方はなあ！！
あの方はなあ！！ 齊天大聖、孫悟空、猿神様だぞ！？』

あ〜、どおりでどっかで見た気がした訳だ。

「なるほど……身外身の術か」

身外身の術とは、齊天大聖、孫悟空の使う術の事で、自分の毛を
変化させる術の事である。

本来、神妙山から出られないはずの猿神が、こんなところに居る
のはそれを使っているからである。

「んじゃ……本気で勝ちにいけますか」

『ちよつとまって！！ 相手は齊天大聖だぞ！？ 孫悟空だぞ！？
猿神様なんだぞ！？ 勝てるわけがないであろう！！』

「まあ、本体じゃないしなんとかなるんじゃないか？ 動きから見
て、力は制限されてるみたいだし……いいから、視覚のリンクたの
むぜ」

そう言っつて横島は大地を這うような低さで猿神の分体へと駆けだ
した。

『ええい！ まったく、怪我をしても我は知らん！！』

「あんがとさん！！」

この時、横島の霊体と心眼がつながる。

額のチャクラが回転し、膨大とも言える量の霊気が体内を巡る。

更に心眼の視覚が横島にもつながり、リンクする。通常の景色に重なり合うように光が見えるようになった。

その光は氣の流れを現している。

『良いスピードじゃわい』

カウンターで錫杖を振るう猿神、しかしそれは人の範囲内で手加減された攻撃だった。

横島は足に靈気を施すことでスピードを上げ、それをあっさりとかわす。

更にハンズオブグロリーの刃を出し、カウンターにカウンターを合わせた。

『ほっ!?!?』

驚いた表情を見せる眼鏡を付けた猿顔のじじい。

地面すれすれから振り上げた刃をかわされ、横島は舌打ちする。

「ちっ、外した」

横島が狙っていたのは猿神の鳩尾のあたりに存在する、核（猿神本体の毛）だ。

それを心眼の視覚とリンクすることで探し当てたのである。

『ほっほっほっほ、危ないところじゃったわい。小竜姫の奴がスペシャルハードコースを受けたい者がおると言っておったが……お主か?』

「……………違いますよ。まあ、オレも受けるつもりっすけどね」

『他にもおるのか……そりゃ、楽しみじゃわい』

そう言っつて横島と猿神は構えをとる。

「んじゃ、限界突破と行きますか!」

『来るが良い!! 小僧!!』

横島が踏み込み、猿神は待ちの構え

刹那の速さで横島は猿神の目前へと移動する。

今までとは比べ物にならないほどの速さ。そして下界に降りるために付けられた枷に猿神は反応出来ず、横島が最速の飛び蹴りを放つ。

横島の放った蹴りは猿神の腹を貫き、身外身の術の媒体となっていた毛を吹き飛ばしていた。

身外身の術が解け、光となって消える猿神

「ロードオブグロリー！！ この足が踏み出すは栄光の道だ！！」

ロードオブグロリーとは、ハンズオブグロリーを足で行い、ハイスピードでの戦闘を可能にした技である！！

ちなみにフットオブグロリーだと流石にころが悪いのでこちらを採用！！

「勝利！！」

手を握りしめ、ガッツポーズをする横島。

しかし……観客たちは静まり返り、呆然とするのみであった。

「ん？ おろ？ どうしたんだ？」

まあ、それはそうだろう。人一人爆散させちゃったんだから……

嫌々沈黙が流れる会場……相手を爆散させたということ、現状の認識が追いつかず、なんとか沈黙を保つ中……一人の男が司会である厄珍からマイクを奪い取っていた

『え、この勝負横島忠夫選手の勝利とします。なぜかと言うと相手の選手は式神だけを選手として登場させていた為、本人は元々場外に居たことが判明したからです。横島選手が相手選手を殺した爆散させ塵一つ残さなかった訳ではございませんので、あしからず』

その説明によって、お、なるほど、など、納得の声が上がるの

であった。

第十六話 『神様からの伝言』

「おつかれ〜」

「お疲れ様です。明人さん」

コートから戻ってきた横島を労う明人。

「しかし、あれって神族だったよな？ しかも猿神……なんだってこんなところに居たんだ？」

「なんか、スペシャルハードコースを受ける人が居るからどうのこうの、行ってたっスよ？ 明人さんの事でも探してたんじゃないっすか？」

「あ〜そういや、妙神山で修行受けた後……そんな事言っただな」

『ちやうちやう。ワシが降りてきたのはこれを買っ為じゃ』

「ん？ おお、格闘ゲームか……闘 伝とはなつかしい……って、
なんであんたがここに居る!？」

横島と明人の間にはいつの間にか猿神の姿があった。

「まあ、確かにお主を探して居ったことは事実じゃよ」

そう言つて明人を指差す猿神……

ん？ オレを？

「んじゃ、スペシャルハードコースを受ける奴つてのを見に来たん
ですか？」

『それは違つと先に言うといたじゃろうが。まあ、ワシも上司に確
認しておけと言われただけなんでの。詳しくはわからん』

「上司？」

「明人さん、なんかしたんスカ？ 神様に目え付けられるってかな
り面倒な事つすよ？」

まあ、お前は実際に経験してるみたいだしな。

「上司つて言つても、じいさんを動かせる様な奴に心当たりがない
んだが……最高指導者クラスか？」

『いんや、もつと上じゃ。最高指導者の父よ……まあ、創造主とで
も言えば良いのかの……キーヤン殿が言うには、最近できた友達に

頼まれたらしいが。ワシもキーヤン殿から頼まれての』

「相手が創造主で……最近友達が出来た……ねえ」

…………… ああ、もしかしてアイツか？

H×Hの管理神……

「ああ、なんとなくわかった。他になんか言ってたか？」

『うむ、』お主のおかげで孤独から解放された。ありがとう』だそうじゃ。それと『お礼に望みがあるのなら聞いてやるう。死んだら迎えに行つてやるからその世界を楽しむと良い』だそうじゃ』

「なるほど……どうやら、本当に俺の知っている奴らしい。伝わるようなら言っておいてくれ、』どういたしまして』って

『そりゃ、無理じゃな。創造主殿はこれだけ伝えて遊びに行つたらしいからの』

遊びにかよ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0605x/>

～神様に呼ばれて～（GSの二次）

2011年11月28日00時45分発行